

とのへてゐたのである。彼は、宗教上では、班禪喇嘛を擁して各盟旗に號令すべく喇嘛を優待してゐる。軍事的には烏滂警備司令に任命されるや、騎兵五六百を訓練する一方、傍江に中央軍官學校内蒙古分校籌備處を設立し、青年七十餘名を選抜して、日本の軍官學校を卒業せる蒙古八雲繼賢を總隊長に、黃浦軍官學校の出身者韓鳳林を分隊長に任命してゐる。彼の意圖は烏滂警備隊と軍官學校を合併訓練して全蒙皆兵制度を施行せんとするにあり、現在彼の指揮下にある兵力は六千、小銃は四千に上ると云はれてゐる。南京政府も、彼のこの運動に重大なる關心をもち、昭和八年の夏内政部長黃紹雄を主班とする招撫員を組織して内蒙古に派遣して種々方策を講じたのであるが結局何等の得ることもなく、蒙古の獨立運動をば、『滿洲國に次ぐ日本の既定

計劃である』と見做してゐる。内蒙古自治會は民族の自決、自治に基づく地方自治を實現し、内蒙古自治政府を建設せんとする意圖にあるもの如く、この實現のために、滿洲國及び日本の援助を求むるのは必然であらう。内蒙古が、蘇聯邦の極東政策の先驅となるか、滿洲國王道政治の均霑下にあるかは、極東の形勢に於て極めて重要な意義をもつであらう。

### 第五節 回教族

滿洲に於ける回教族は、その數僅かに二十萬と云はれており、吉林地方に多く、大體において東干族（回訖と漢族との混血種）に屬し、その宗派は殆んど全部がスンニ派である。滿洲國の出現によつて、滿洲に於てはこれ等小數種族の問題がとり上げられ、回教族も、回教族としての民族的

活動を開始し始めた。哈爾濱一萬の回教族は在滿二十萬回教徒の經濟戰線を擁護するために昭和七年十月二十八日滿蒙回教協進會を組織し、十一月十六日哈爾濱行政長官公署より民族團體としての公許を得、會長に黑樹臣を選び、副會長には孫輯辰を推して、大的に民族運動を開始することになつた。そして、そのために十一月三十日新京に於て、回教族代表者會議を開催することが當時議決されたが、これは、回教族内の内紛等によつて、十一月三十日には遂に行はれなかつたやうである。然し回教族が、この會議に於て上すべく準備されてゐた議事日程は極めて注目に値すべく、(1)リットン報告の反駁決議、(2)回教徒の民族自決、(3)特別教育制度としての回教中學の創設、(4)軍人、官公吏を滿洲國に任命することの請願、等であつた。

## 第二十篇 重要都市



- 第一章 國都新京
- 第二章 滿洲國重要都市
- 第三章 關東州都市



## 第十二篇 重要都市

### 第一章 國都新京

#### 第一節 沿革

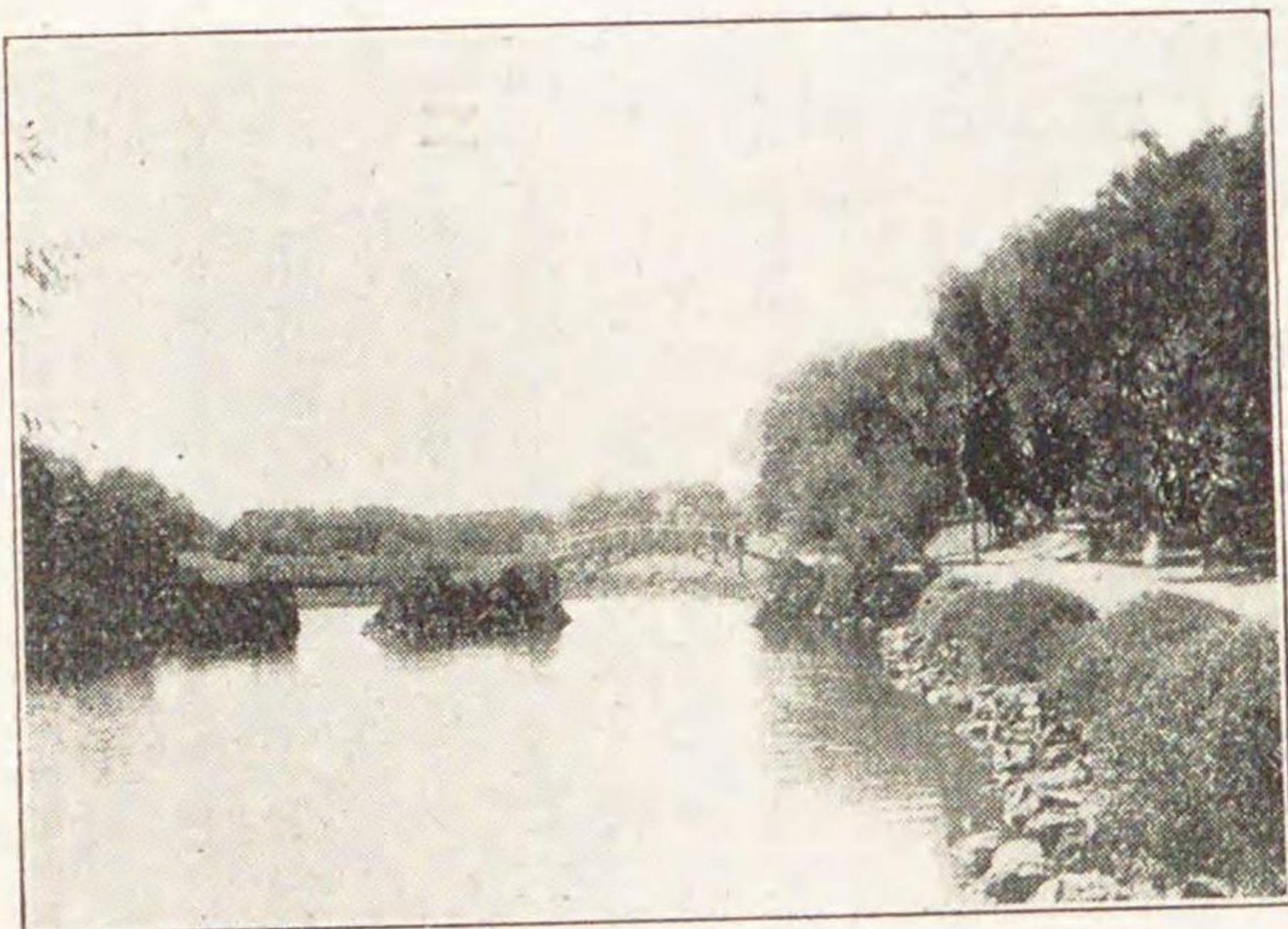
新京は南北滿洲の中央樞要區に當り、大同元年三月一日滿洲國の獨立と共にその首都と奠められ、もと長春と稱ばれてゐたが新京と改稱されたものであり、特別市制が布かれてゐる。この地は我が南滿洲鐵道の最北端に位し、南滿・吉長・北滿の三大鐵道及び長大豫定線の重要な結節點であり、新國家領域の略ぼ中央に當り、統治上の便宜と地勢的關係等から國都として選定されたものである。この地はもと寛城子と稱され、清朝の嘉慶五年現在の長春を隔つること遠からざる長春堡に

理事通判を置き長春と名づけ、更に道光五年に至り長春を移して現在の長春の地點たる寛城子に設け、後昇格して縣治を布かれたのである。更に日露戰役により長春以南を日本に於て繼承するや、こゝに我が南滿、東支更に吉長の敷設せられるに及んで、三線接續點として日支露三國鐵道及び該三國勢力の接衝の要點として重要視せられるに至つたのである。

#### 第二節 現況

市街は舊城市・新市街・開埠地及び寛城子とに分れ、舊市街は街衢整然として人馬織るが如く、城壁は半土壁にして各城門の周圍にのみ煉瓦を用ひて塙を造り、その延長約五哩、大街は南北を貫通する一條とこれを中心とする東西の横斷路四條にして、外に幾多の小街とより成つてゐる。

新市街（鐵道附屬地）は舊市街に連り、滿鐵長春停車場は大正三年の建設



新市街（鐵道附屬地）は舊市街に連り、滿鐵長春停車場は大正三年の建設

で、その莊麗なることは奉天のそれに亞ぎ、市街はこれを中心として放線形



にある。

### 第三節 國都建設計畫

今や新國家の首都として新京は政治的並に經濟的中心となりつゝあるが、滿洲國政府は三百萬人包擁を標準として建設的改造を急ぎつゝある。即ち市街將來の必然的膨張に對して有機的統制をなすために、こゝに國都建設計畫を企圖し、大同元年九月この事業の執行機關たる國都建設局並に諮問機關たる國都建設計畫諮問委員會を組織した。

國都建設局は同年十二月國都建設計畫概要並に同豫算案を作成し、これを國都建設諮問委員會に諮り、大同二年一月これを國務總理に稟請し、同月二十四日國務院指令第三號をもつて認可の指令に接した。左にその計畫内容並に豫算表を抄録する。

#### 一 包擁人口

計畫區域内に於ける人口増加率平均五%で、大同元年十二月末日に於ける人口約十五萬人。依つて將來に於ける人口増加率を年平均六%と想定して、今後二十數年間で人口五十萬を包擁するものとする。

#### 二 計畫區域

高臺子附近を中心として東に六・五、南に一〇・五、北に八・五、西に六・五の地域で、北西端は崔家營子附近、北東端は金錢堡附近、南方は高家店附近の丘陵地、東方は石碑嶺附近に至り、西方は大隨窩堡に及ぶ廣袤約二百平方、西の區域とする。

#### 三 計畫事業區域

計畫區域二百平方内、近郊並に比較的發展の遅いと認める地域百平方を除外してその内百平方の地域とする。但しこれより尙ほ南滿鐵路附屬

地五平方中、東鐵路附屬地四平方、後年逐時整理する所の商埠地四平方、縣城内八平方等、計畫事業の施行を必要としない地域を除外する時は計畫事業の實際面積約七十九平方となる。

#### 四 地域制度

住居地域・商業地域・工業地域・特種地域及び雜種地域の五種とする。

住居地域は更に之を一、二、三、四の四級に分け、一宅地を夫々八百七十五平方、七百七十平方、四百四十平方、三百三十平方とし、人口密度夫々一平方につき四千人、一萬人、一萬二千人とする。

商業地域はこれを卸賣・小賣及び商館の三地域に分け、人口密度一平方に付一萬二千人とする。

工業地域は重工業及び輕工業の兩域に分けるものとする。工業、特種及び

雜種地域には特に住居地を設定して統一を計るものとする。

建築に關しては許可主義に依るものとする。建築線設定に關しては前面道路境界より相當距離を後退させることが出来るものとする。

#### 五 道路網

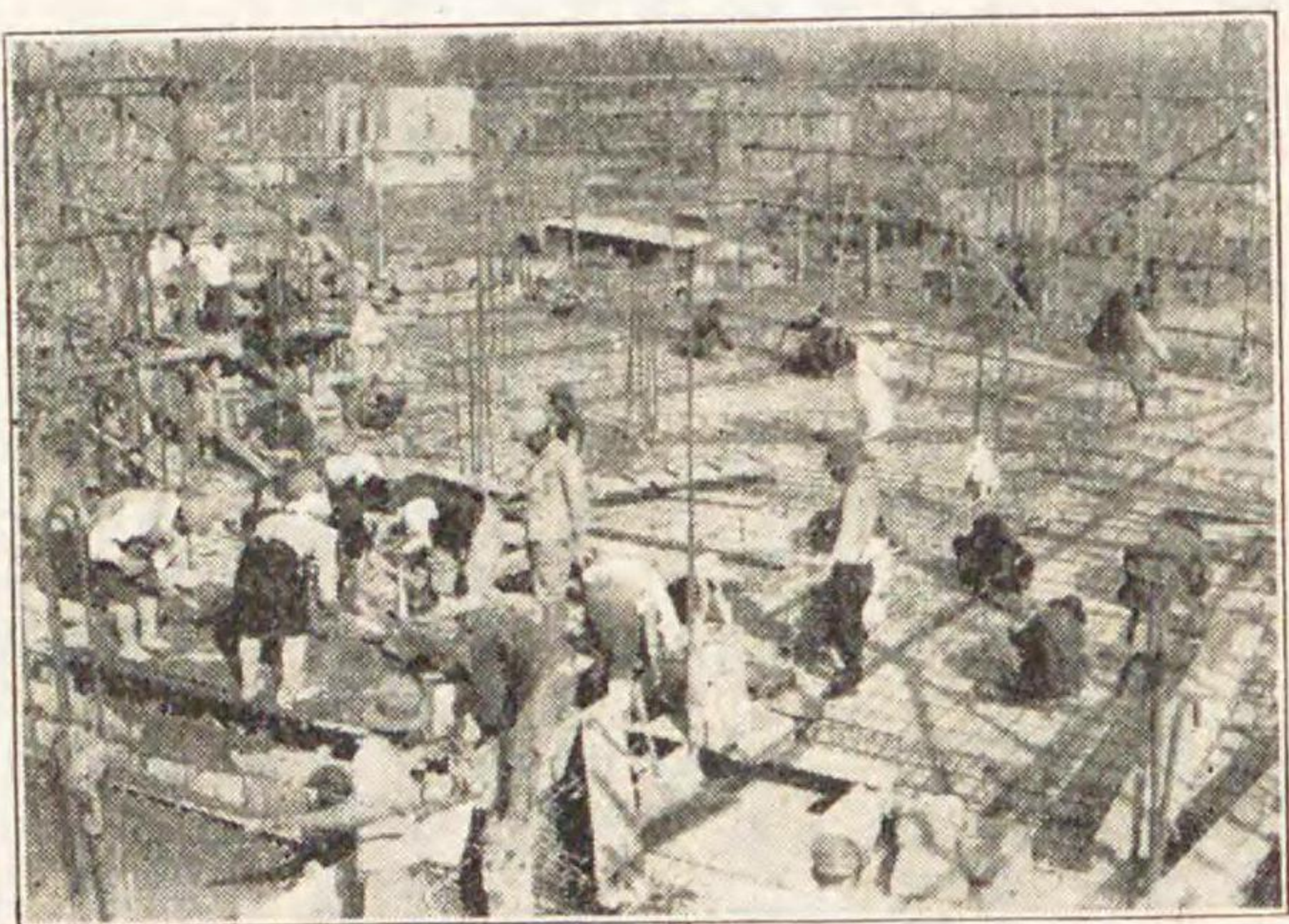
農安・懷德・奉天・伊通・雙陽・吉林・哈爾濱に至る七線を以て構成する。

#### 六 街路

幹線、支線及び補助線の三種に區分し、幹線は二十六乃至五十四米、支線は十乃至十八米、補助線はそれ以下とし、地域の種類又は地勢に依つてこれ等を併用する。公園内の苑道若くは公園を連結する苑道には騎乘路を特設する。

主要街路には遊歩路を設ける。主要中心地帯には廣場を設け、公園たる效用を具備させると共に中心地帯の風致

風格を向上させる。市内と郊外又は近隣地間の運搬に使用される荷馬車に對



況狀設建都國るけに京新

しては、特に一定の通過道を定めて特殊の鋪裝を施す。







## 第二章 滿洲國重要都市

### 第一節 奉天省

#### 一 奉天 [Feng tien]

奉天は一名瀋陽とも稱へられてゐる。蓋し現在の渾河は昔瀋水と呼び、その北に當つてゐるため、元代には瀋陽路と呼ばれ、明代には瀋陽衛府の所在地であつたが、前清の太祖商業を肇めて都をここに奠め盛京と稱し、その後北京遷都と共に奉天府を置き最近に至つたが、民國政府はこれを遼寧と改稱し、奉天は滿洲に於ける政治經濟的中心地として近くは奉天派軍閥張作霖の本據として半獨立國家の如き觀を呈してゐた。

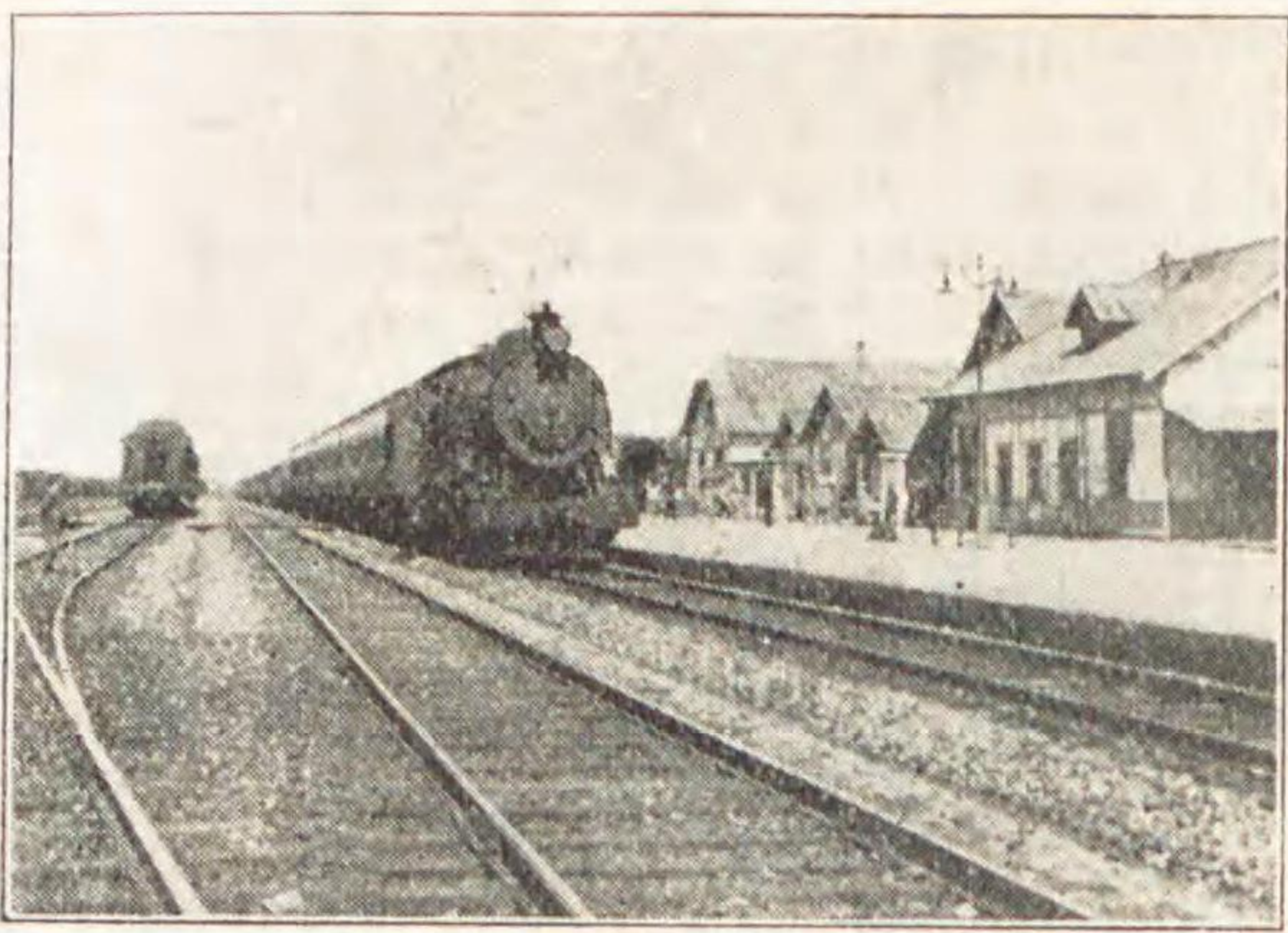
道で、建物は善美を極めて逐年停止することなく發展してゐる。南滿洲鐵道はこの地に於て安奉線と合し、更に奉山、瀋海兩鐵道と相會し、歐露支那内地・朝鮮各地への中繼地として重要な地位にある。生果・石炭・豆粕・麥粉・綿布の出貨多く、鐵路總局・燐寸會社・油房・精米場・窯業會社・織物會社・煙草會社等の大會社が林立し、物資の製産、集散に繁忙を極めてゐる。奉天城は内城・外城の二域に分れ、内城は清の太宗天聰五年の築造にかゝり、周圍約十五里、東西南北に各築造で周圍大小二門を開き、外城は順治十四年の約三十里に及んでゐる。

七百九十人、内地人は約二萬五千餘人を數へられる。

遼河口の要津に臨み、古くから商業市場として繁昌したところで、滿洲最初の開港場であり、滿洲文化の母屋である。咸豐七年天津條約によつて牛莊の開放されるに及んで、英國領事はその下流の當地に駐在し、自ら牛莊と稱し條約上の通商地として以來自然外國人間には牛莊と稱されるに至つたのである。

新市街は滿鐵線停車場の周圍に當り、營口市街の東方を占めてゐる。此處は日露戰役後日本軍政官によつて建設されたが、後に至つて居留民團がこれを繼承し、市街の正式整備と建物の築造、水道、電氣等の工事を竣り、學校を建て公園を開き文化都市の面目を整へた。大正十二年十月以降滿鐵附屬

地として經營されてゐる。港は西は渤海灣を隔てて葫蘆島と相對し、遼河河



南滿洲鐵道營口驛

ら三月までは結氷して船舶の出入不能となる。

營口は滿洲に於ける商業地として支那人間に重要視され、この地を根據地として有力な商家の置籍する者が多い。雜貨商・綿絲布商・糧棧・質兩替店の老舗が多く、大豆・高粱・豆粕・支那酒・藥材・柞蠶・甘草・人蔘を輸出し、綿織物・石油・砂糖・茶・紙を輸入する。人口は約七萬五千、日本管内六千七百五十人、そのうち日本人は總數三千餘人である。

#### 三 大石橋 [Ta-shih-chiao]

奉天省營口縣下に屬し、滿鐵の一驛で、營口支線の分岐點である。大石橋の名は昔時市街を貫通する淤泥河に架した石橋に起因すると傳へられてゐる。市街は鐵道附屬地と舊市街とに分れ、人口約一萬餘、内二千の日本人を包含してゐる。産物は雜穀を主とし、この

外に多少の棉花及び鑛産物を出す。就中鑛産物としてのマグネサイトに至つてはその埋藏量二億噸と稱され、年額五十萬噸のマグネサイトを産出する。商業は附近に營口の大市場を控へるため、あまり盛んではない。

尙ほ西南約四軒にある迷鎮山の海雲寺は古刹として耀州城時代からその名全滿に轟き、また寺内の娘々廟の會式は參詣者數十萬、滿鐵は臨時列車を増發するの盛況を呈する。その他驛の北方約二十町の地點に遼代の耀州城址たる岳州城があり、僅に城壁を残すのみであるが、一に唐代の獨木關の遺址とも傳へられてゐる。

#### 四 鐵嶺 [Tieh-ling]

鐵嶺は渤海時代から發達した都市で、今から約一千二百年の古い歴史を有する。遼河の左岸に位し、鐵道開通以前は拘鹿、海龍地方の穀物の河運に

口から十三哩を測る深處を卜し埠頭を設備したものであるが、毎年十一月か



よる集散市場として年々一百万石を呑吐し、奉天以北第一の商業地であつ



街市人那支の内城嶺鐵

た。鐵嶺は日露戦争後間もなく通商市場として開放され、最も早く日本商人

の定着を見たために、商工業の根柢が深い。開原の發展に伴ひ、幾分退嬰の氣配がある。

城内は明の洪武年間、周圍六支里の城壁を築き、四門を開いてゐたが、漸次取毀され、煉瓦は道路工事に用ひられてゐる。新市街の面積は百八十八萬坪で、開放地下連續してゐる。旅團司令部、領事館、歩兵聯隊、赤十字社支部、滿鐵地方事務所、幼稚園、小學校等は新市街にある。大豆、米、高粱、柞蠶、葉煙草、麥粉、豆粕等を集散する。城内には縣公置、交渉局、審判廳、商會、小學校、中學校、銀行、中日俱樂部等があり、開放地には居留民會がある。人口四萬五千四百四十人のうち内地人は約二萬七千人に及んでゐる。

五 四平街 [San ping chieh]

奉天省の北部滿鐵の一驛市である。但し四平街の名は驛の西方約五哩餘に

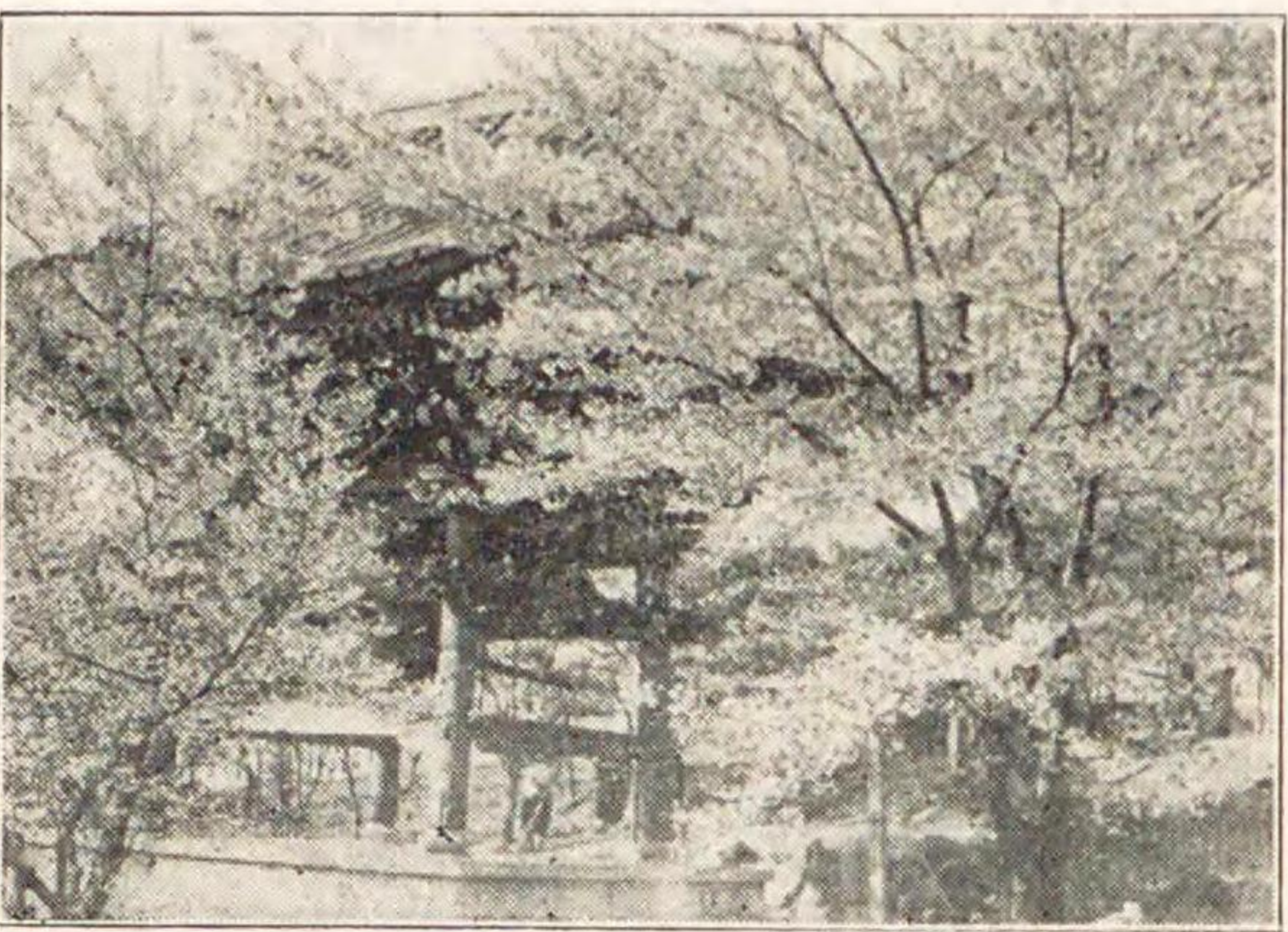
當る四平街と稱する邑鎮に因んだものである。その發達は青清鐵道の明治四十年滿鐵の經營に移つて以來のことである。當時は四邊人口稀薄荒涼たる状況を呈してゐたが、爾來長足の進歩を來たし、今の盛況を見るに至つたのである。現に日支人等併せて人口約一萬二千を有し、殊に近年こゝを起點とする四洮鐵道の開通を見るに至つてはその將來の有望なるは言ふまでもなく、現在既に鐵道沿線に於ける重要都市として十分なる資格を具備してゐる。この地は滿洲と蒙古とを繋ぐ關口とも云ふべく、交通上買賣街、八面城、鄭家屯等を経て廣大なる蒙古の地を前に控へ、また同省の穀倉たる山東地方を背後に擁し、大疙疸その他大小都市への要衝に當り、殊に四圍には一望百里の沃野を控へ、滿洲特殊の大豆・高粱・包米・粟・麻子・蘇子・瓜子等農産物の集中

するもの年額約二十萬噸以上に達し、加ふるに四洮鐵道の開通は蒙地への物資供給市場としての地位を、確保するに至り、市況は頗る活氣に満ちてゐる。

六 安東 [An-tung]

安東は大連、營口と並んで南滿三港と云はれ、開港場であるが、市街は鴨綠江河口を遡る十六哩の地點にあつて、朝鮮の新義州と相對し『木都』と呼ばれるほどに鴨綠江材の搬出市場として繁華な市街である。新市街は日露戦役中開拓されたもので、明治三十七年に日本人の入市を見たが、三十九年に開放され、支那側の道臺も亦鳳凰城から移轉して來てこの地の商埠地としての地歩を堅めた。日本人は銳意市街を建築し、排水、築堤の工事を竣り、市區計畫を樹て整然たる市街が竣工するに至つた。面積二百七十餘萬坪で市

場通、大和橋通は最も繁榮を極めてゐる。物産は鴨綠江材を大宗とし、柞蠶・



開滿の花櫻のけ於に園公山江鎮東安

豆粕・豆油・米・支那酒等を出し、製材業・機業が盛んである。滿洲人街は沙

河鎮と呼ばれ、即ち安東縣である。沙河と鴨綠江の合流點に位し、朝鮮地方との船舶貿易が盛んに行はれる。

七 西安 [Hsian]

奉天省掏鹿の東北約四十五里に位する縣城である。一に土名を大疙疸又は大疙瘩とも云ふ。この地方も康熙年間以來清朝の狩獵地として荒蕪に委せられてゐたが、光緒二十二年開放し、移民開墾を奨励された結果、漸く人口増加し、同二十八年縣を置かれた。現に戸數は支那官憲の稱する所よりも少く、實數は戸數一千五百、人口は四萬と稱され、少數の日鮮人が含まれてゐる。市街は龍首山を負ひ、南に東遼河を控へ、大十字街を成してゐる。この地方は所謂南滿の穀倉たる山東地方に當り、然もその中心地である。従つて農産物の集散は頗る豊富である。その集散物資中土産品は二十萬石の移出を



有し、その種類は大豆を大宗とし、その他高粱・粟・小豆・大麥等の雜穀十萬石、葉煙草約十萬斤、藍靛・麻及び柞蠶等がその主なるものである。

また北方約三軒餘に在る半載河炭坊は坑數七、年産額約三十萬斤、俗に大挖炬炭坊と稱されてゐる。炭層は五尺乃至六尺のもの及び二十尺内外の厚さを有するものと推定されてゐる。炭質は黑色脆弱であるが、粘着性に富み、その優良なる骸炭製造に適してゐる。工業には燒鍋・油房の外特に見るべきものがな。

八 西豊 [Hsi-feng]

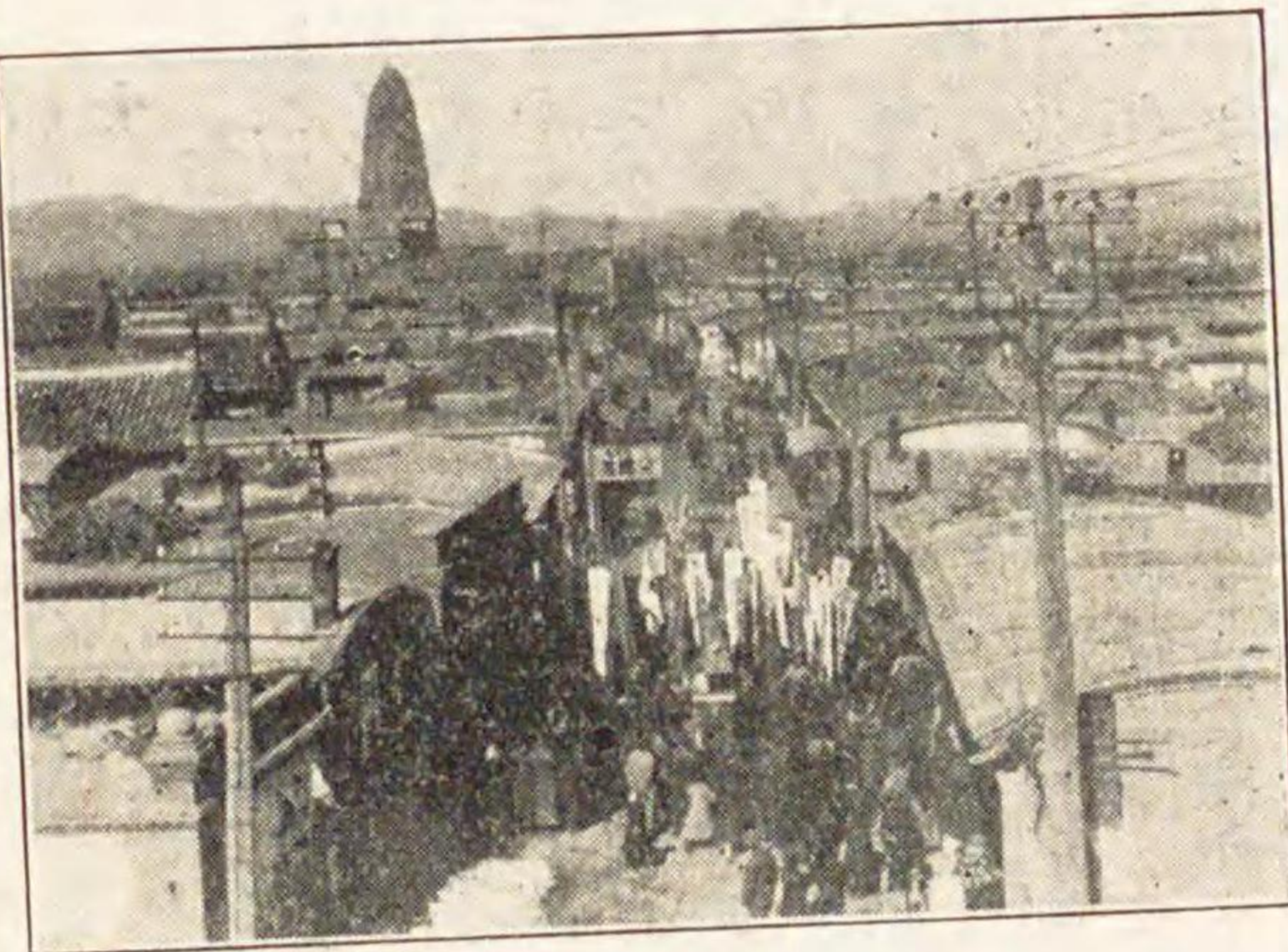
奉天省西豊縣公署の所在地で、俗に拘鹿と稱せられてゐる。清代には朝廷の狩獵地として荒蕪に委せられてゐたが、光緒二十二年開放し、本部より移住開墾を奨励した結果として漸く人口の増加を來し、同二十八年西豊縣を創

設、縣公署の所在地となつてからこの地方の政治經濟的中心地となつたのである。

市の北方は連峯重なり、南方は冠河を隔てて平野が開けてゐる。市街は整備し、殊に大街に面して大商店櫛比し頗る繁盛である。開豊輕便鐵道は開源からこの地に達してゐる。奉天省の穀倉と云はれてこの一帯の特産物中、大豆の輸出は最も多く、往年開原豆として聲名を擡げたものであるが、現に大豆の外に高粱・煙草・麻・柞蠶等の集散が多い。商店は吳服店・雜貨店が多く、糧棧が多い。特産物の仕向先と雜貨の仕入先は、開原・奉天・鐵嶺・營口・大連等である。現に三萬餘の人口を包容してゐる。

九 錦州 [Chin-chou]

錦縣の首都で、縣公署の所在地である。奉天から百四十七哩、山海關から



錦州城南南明に於ける街頭宣撫の状況

野が展開してゐるが、三十支里にして渤海海岸に出られる。張學良は一時こ

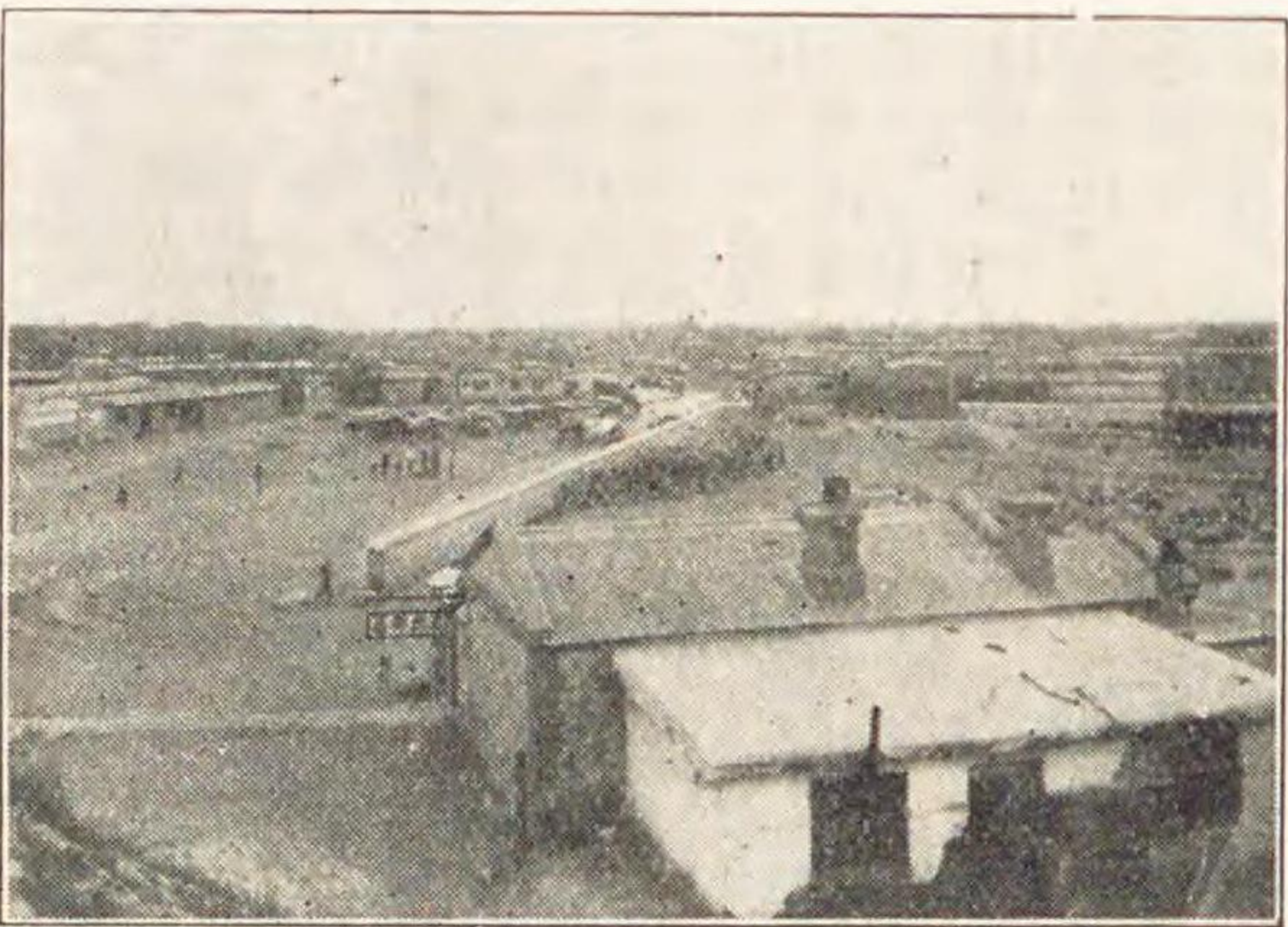
の地に遼寧省政府を建設せんとし、兵力を集中し、滿洲の治安に防害を加へたので、日本軍の空襲を受け、遂に關内へ退却するの餘儀なきに至つたが、この時以來錦州は世界的に著名となつた。

物産は穀物・農藝製品・各種器具・衣服・材木等を集散し、瑪瑙石細工を出し、又絨毯・石綿・獸皮等を産する。工業は燒鍋・油房・染屋・製粉工場・織布工場・車輪工場・鞋製造所等である。人口約六萬と稱せられてゐる。

一〇 新民 [Hsin-min]

奉天省新民縣公署の所在地で、人口三萬二千内外の奉山鐵路の主要驛である。清の乾隆年間に回教徒によつて開拓され、當時は新民屯と呼ばれた。奉天の西方三十七哩の地點にあり、日清通商條約によつて商埠地として開放された、市街は低地を占め、降雨時の浸

水は免れない。農産物の集散地であつて、移入は移出を超過してゐる。商業



新民府驛の高臺より市街を望む

は雜貨店が多く、取引は彰武・法庫・昌圖等が多い。吳服類は營口・上海等を

經由し、日本品・支那品を輸入する。工業は油房・磨房・燒鍋の外に、織布・木器具・鐵工・製麵等の工場が多い。今後の發展が約束されてゐる。

一一 通化 [Tung-hua]

奉天の東八十里の地點にあり、渾河に瀕し、通化縣公署の所在地である。もとは荒涼たる無人の原野であつたが、清の同治年間に開放されるに及んで山東方面の移住民によつて開墾され、漸次發達し光緒二年に縣治が布かれた。

市の東方に渾河の埠頭があり、戎克の航行が盛んである。集散物資は穀類・麻、木材、薪炭等である。木材は筏に組んで安東に送られ、又陸路牛馬力によつて奉天に送られる。商賈は雜貨・吳服・藥店等多く、特産物の取扱ひは奉天・安東を仕向地としてゐる。なほ綿布・油類・藥品・麥粉等は安東・奉天



方面より移入される。工業は製粉・製油・醸造・鐵工等であるが、大規模のも



通化縣城の一部 渾河の埠頭に多数の戎克を見る

のはない。人口は四萬七、八千と云はれてゐる。

### 二 鄭家屯 [Cheng-chie-tun]

四平街の西方五十四里、四洮鐵路の



鄭家屯市街北

主要驛であつて、遼源縣公署の所在地である。もと蒙古旗下にあり、遼河舟

行區域の最終點に位し、四洮鐵路開通前には、繁華な商業地であつたが、近時稍、沈衰の状態である。物資の集散は農作物、農産製品・畜類・畜産品・獸毛・甘草・絨氈等である。商戸は雜貨・藥屋・吳服店であつて、綿絲布・飲食調味料・鐵器・油類を移入する。移出品は穀物類であつて、鐵路四平街へ送られる、工業は製油・製粉・醸造・絨氈製造所・皮革・染屋等である。人口は四萬以上と註せられてゐる。

### 三 昌都 [Chang-tu]

昌都縣公署の所在地であつて、滿鐵昌都驛の西方約三里の地點に位する一都會である。この地は明代の遼河衛の地で、清朝に於ては蒙古博用旗下に屬し、荒涼たる原野であつたが、嘉慶七年開放して漢人の移住開墾を奨勵した結果漸次人煙を増し、遂に光緒二年昌圖府が置かれ、更に民國二年に縣治を

布き現今に至つたのである。

現在人口四萬八千内外を擁し、諸官衙・學校の設備を有し、商業は附近の各市鎮を支配したものであるが、私帖子發行の禁止以來昔時の觀なく、殊に鐵路開通後市況沈衰の傾向にあるが、ともかくこの地一帯の中心都市である。

### 一四 法庫門 [Fa-ku-men]

奉天省法庫縣公署の所在地であつて、鐵嶺の西北十五里の地點にある。この地は遠く隨代の所謂黑水の地で、爾來幾變遷を経て、その法庫廳を置かれたのは光緒二十二年であるが、明治三十九年の日清條約によつて開放され、縣治を布かれたのは民國二年のことである。

市街は西北に鐵壁、法庫の二山を負ひ、南に遼河支流の沙河を控へ、官公衙その他諸機關を具へ、市街として盛觀を呈してゐる。然し商業は從來滿洲

隨一の蒙古貿易地として頗る優越的なる地位を占めてゐたが、鄭家屯が開放され、剩へ打通線の開通により大打撃を受け漸次衰微の傾向をたどりつゝある。

集散物資は大豆・高粱・粟等の穀物及び豆粕・豆油・麻油・麻餅・麥粉・曹達等である。商業の取引先は營口・鐵嶺・新民・奉天等である。蒙古人の取引は牛馬・乳豆腐・皮類・酒等である。人口は約二萬である。

### 一五 通遼 [Tung-liao]

四洮鐵路、鄭通線の終點に位し、遼河河岸に近い。一に伯音太來又は巴林愛新鎮とも云ふ。現在奉天省の管下に置かれてゐるが、早晚興安省へ移管されるものと見られてゐる。農産物・畜類・畜産品の集散市場であつて、甘草の移出も少くない。主として營口・大連へ仕向けられる。商業は相當活潑であつ

て、綿絲布・雜貨の取引多く、日本品が優勢である。仕入先は營口・鄭家屯・奉天・錦州等である。工業は製粉、醸造、製油の小工場が多い。人口四萬二千と稱せられてゐる。

### 第二節 吉林省

#### 一 吉林 [Chi-lin]

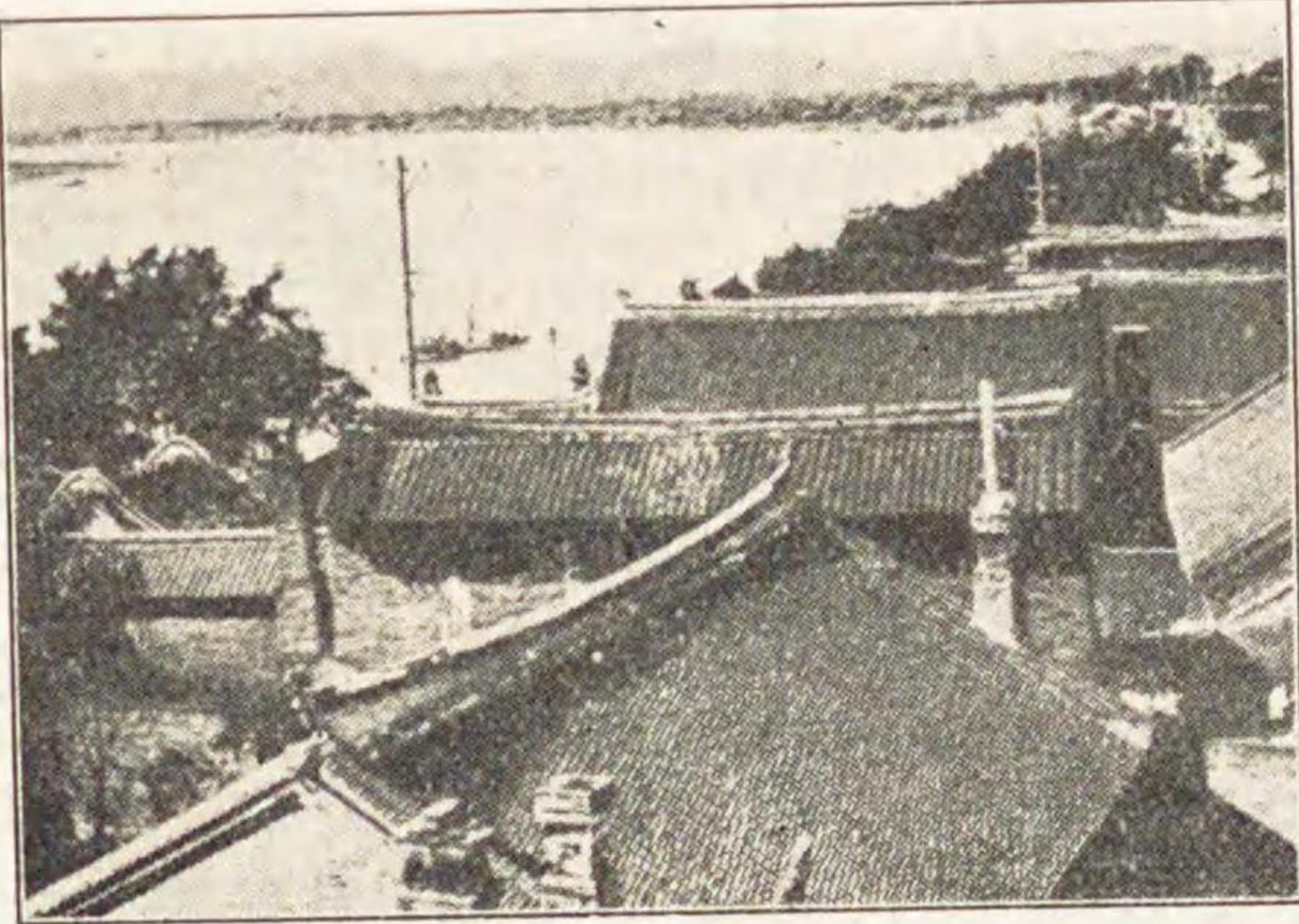
吉林省の首都であつて、松花江岸に位し、京圖線に沿ひ、吉海鐵路の起點に當る。省公署、縣公署の所在地である。この地は明代から著明であつて、『船廠』の別名があつた。滿洲語の吉林烏喇は即ち大江沿岸の意から吉林と稱されるに至つた。古くから松花江舟航の要津として知られ、又北京から奉天を経てこの地まで官路が開けてゐた。

市街は松花江の左岸に沿つて形成され、東西に長く、南北に短く、その西



北西は山岳を背負ひ、南方は江に臨み、その人口約九萬、市内の殷盛さは一見その吉林省首府たるを思はしめるに充分なるものがある。この地方は附近一帯の山岳地方として農耕地少く、従つて穀類の産額は少いが、木材の産出は甚だ多く、その材種赤松・落葉松・杉・松等で總産額の約七割を占め、その他柞木・樺木・紅葉樹・山梨樹等で、その大部分は松花江上流なる頭道溝・三道溝地方より流筏によつて運搬されたものである。木材に次で有名なものは煙草で、その年集散額は一千五百萬乃至二千萬斤と稱せられてゐる。これに次で重要なものは、藍・麻・菌類・蜂蜜・藥劑・獸皮・薪炭類である。

物資の集散は右の如くであるから、商工業も従つて盛んである。市場は樺市・牛馬市・草市の三種に分れ、何れも吉林に繁榮を添へるものである。工業



吉林市街と松花江

としては製材・燐寸・製粉・搾油・醸造・硝子・染色等であるが、就中製材業は

尙商埠地は停車場より吉林城の新關門まで東大馬路、中大馬路の二大道の左右に擴がり、近年急速なる發展を來した。人口は二十萬人内外であつて、日本内地人は一千人内外である。

二 哈爾濱 [Harbin]  
吉林省の北境松花江の右岸に位する北滿の屈指の大都會である。この地はもと江岸の一寒村に過ぎず、従つて蒙古人はその滿目平坦の草地にして遙かに哈喇を望むが如しとして哈喇賓と呼んだのが今日の名に轉訛したのである。然るに近々三十年間に於て、今や産業・經濟・交通の三方面より見るも、またその典型的國際都市として政治的反映を成す上から觀察しても、眞に全滿洲の重心たる地位を占むるものである。

この地はロシヤが東支鐵道を敷設するに當り、その中心市場たらしめると

共に、他面將來東洋に於けるモスクワたらしめる企圖のもとに建設せられたものである。即ちロシヤは明治二十六年舊哈爾濱に根據を置き、土地を買収して新市街建設用地となし、着々準備を進めたが、明治三十年に至り、更に土地を買収しもつて理想的な都市建設の基礎を確立着々その工を進めたのである。然るに偶々北清事變に累され全市盡く灰燼に歸し、或は日露戰爭による敗戦のため頓挫を來し、また本國の革命瓦解の影響等の打撃の大なるものがあつたにも拘らず、兎に角北滿の經濟的地理的諸條件とその建設的努力と相俟つて、短時日の間に驚くべき發展を遂げたのである。

市街は新舊二區から成り、新市街は即ち北滿鐵道附屬地であつて、舊市街は傳家甸である。通常哈爾濱と云ふのは主として新市街を指すのである。市街は埠頭區・八區・新市街(秦家崗)・馬家溝・舊哈爾濱・頭道街等に分れ、ロシヤ人を始め、外國人と滿洲國人との混合市街である。傳家甸は純然たる滿洲國人街であるが、もと傳一族によつて始められたのでこの稱がある。大同二年七月哈爾濱市と附近村落を合せて特別市制が布かれた。集散物資は特産物、各種工業製品で、貿易・商業は殷盛を極め、工業は製粉・製糖・製油・電氣・製材・造船等の工場があり、殊に製粉業は旺盛である。北滿特別區・哈爾濱特別市等の諸官公署が置かれ、白系露人の居住者が多い。總人口は三十九萬人前後である。哈爾濱はまた遊覽地としても著明であるが、その埠頭區(プリスタン)は松花江に面し、商業區であつて、特にキタイスカヤ街は大商店が櫛比し商業は殷盛である。日本人は主としてモストワヤ街一帯に居住し

てゐる。哈爾濱の夏季は白夜が續き、松花江は納涼、水泳によく又公園の散策にもよい。

III 雙城堡 [Shuang-cheng-pu]  
哈爾濱の南方約二十四哩、北滿鐵道南部線の一驛で繁華な商業都市である。而してこの雙城の名はこの地から約二十哩の地に東關雙、西關雙の兩城があつたのに起つたと傳へられてゐる。この地はもと官設郵便驛として阿什河、伯都納等と共に古くから北滿の都邑として著はれ、殊に清末滿洲への移民獎勵の結果として人口の増加を來し、且つ東支鐵道以來物資の集散力は急激に増大した。その集散物資の主なものは小麥・稗・玉蜀黍等で、その出廻數量の多いことは北滿屈指の位置を占めてゐる。工場は製粉・油房・燒鍋等がある。宣統元年府が置かれ、民國二年縣に改められ、滿洲國の成立と共に



雙城縣が置かれた。人口約五萬三千である。

四 三岔河 [San-cha-ho]

吉林省扶余縣管内に屬し、長春より百三十九軒に當る東支鐵道南部線驛の所在地である。その東方約一哩弱に石頭城子市街を控へてゐるが、同市街の繁榮は三岔河に移動するの傾向が著しく、人口三萬五千餘を擁し、山東、山西人等の移住開墾によつて、創始された市街である。平坦な沃野中にあつて、農産物の集散市場である。現に東支鐵道南部線中穀類の發送高に於て第一位を占め、従つて將來は三岔河が同じく石頭城子の名によつて、寧ろその本街となるべきは殆んど必然的に豫想されて居り、現に同驛は俗に石頭城子の名をもつて呼ばれてゐる。

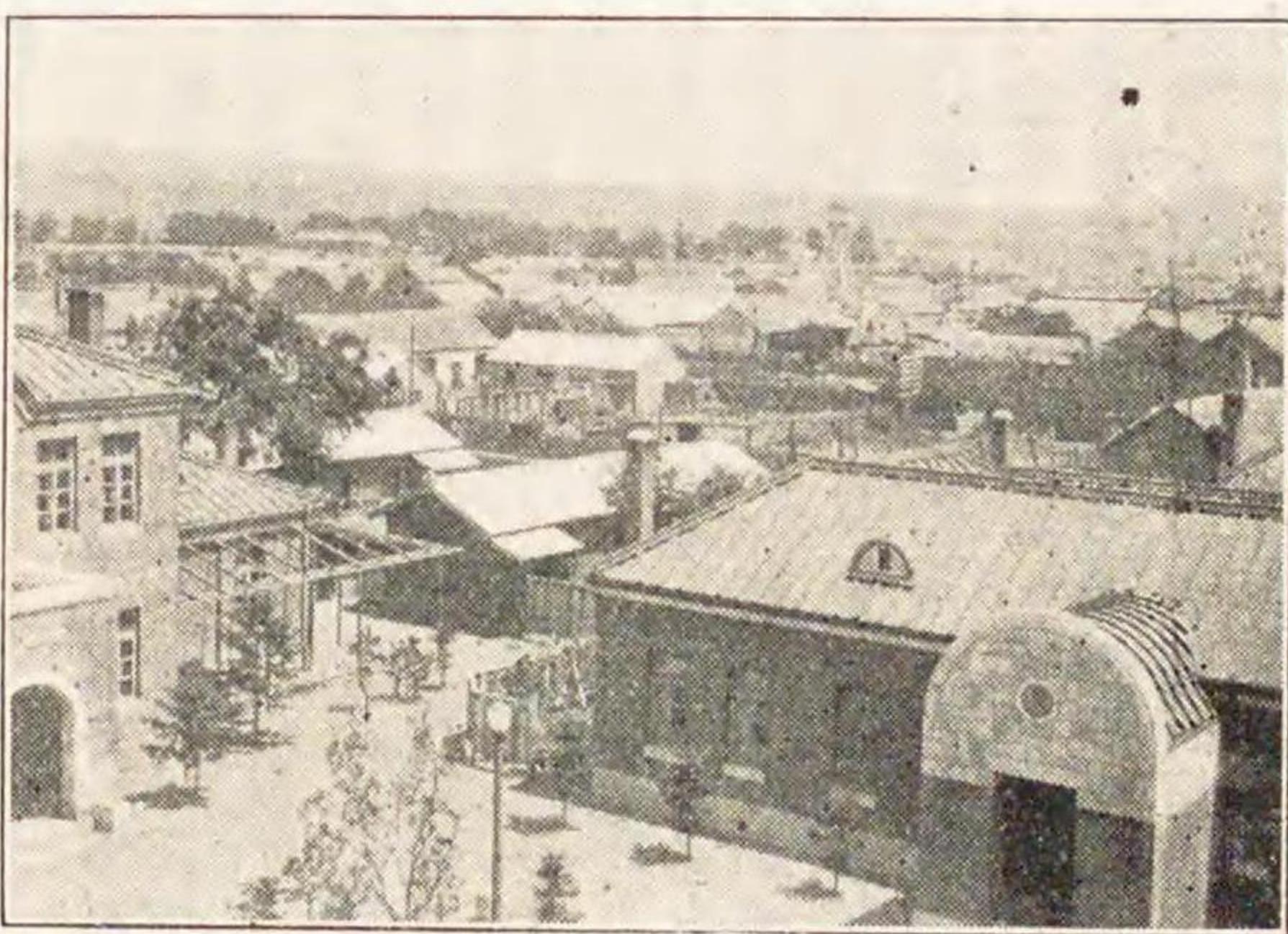
五 一面坡 [I-mien-po]

北滿鐵道東部線の景勝地として知ら

れ、人口約一萬五千、そのうちにロシア人約二千人、日鮮人約三百名を包含してゐる。この地を集散地とする物資は大豆・小麥・稗・高粱・大麥・玉蜀黍・米・豆粕・豆油等で木材・蜂蜜・牛乳・葡萄酒・燒酒・葡萄酒等の生産を有し、その種類は頗る豊富である。従つてこれ等の取引に従事する大商店多く、また他の地より來集する者多く、商取引は頗る活氣を呈してゐる。元來この地は阿片・モルヒネ等の發賣所を公設し、賭博場を公設して、繁昌を促進したものであつた。

六 局子街 [Chu-tzu-kai-chieh]

吉林省延吉縣公署の所在地であるが、依然として局子街と俗稱されてゐる。五十年前までは樹木叢生し野獸の徘徊する荒涼未開の地であつたが、その頃から邊境鮮人の潛入開墾に従事するもの増加し、清朝またその對抗策と



局子街の支那街

して招墾局を設け、漢人の移住するを獎勵するに及んで部落を形成し、宣統

元年日支間島條約によつて龍井村、頭道溝と共に開放され、更に市街となつ

て今日に及んでゐる。

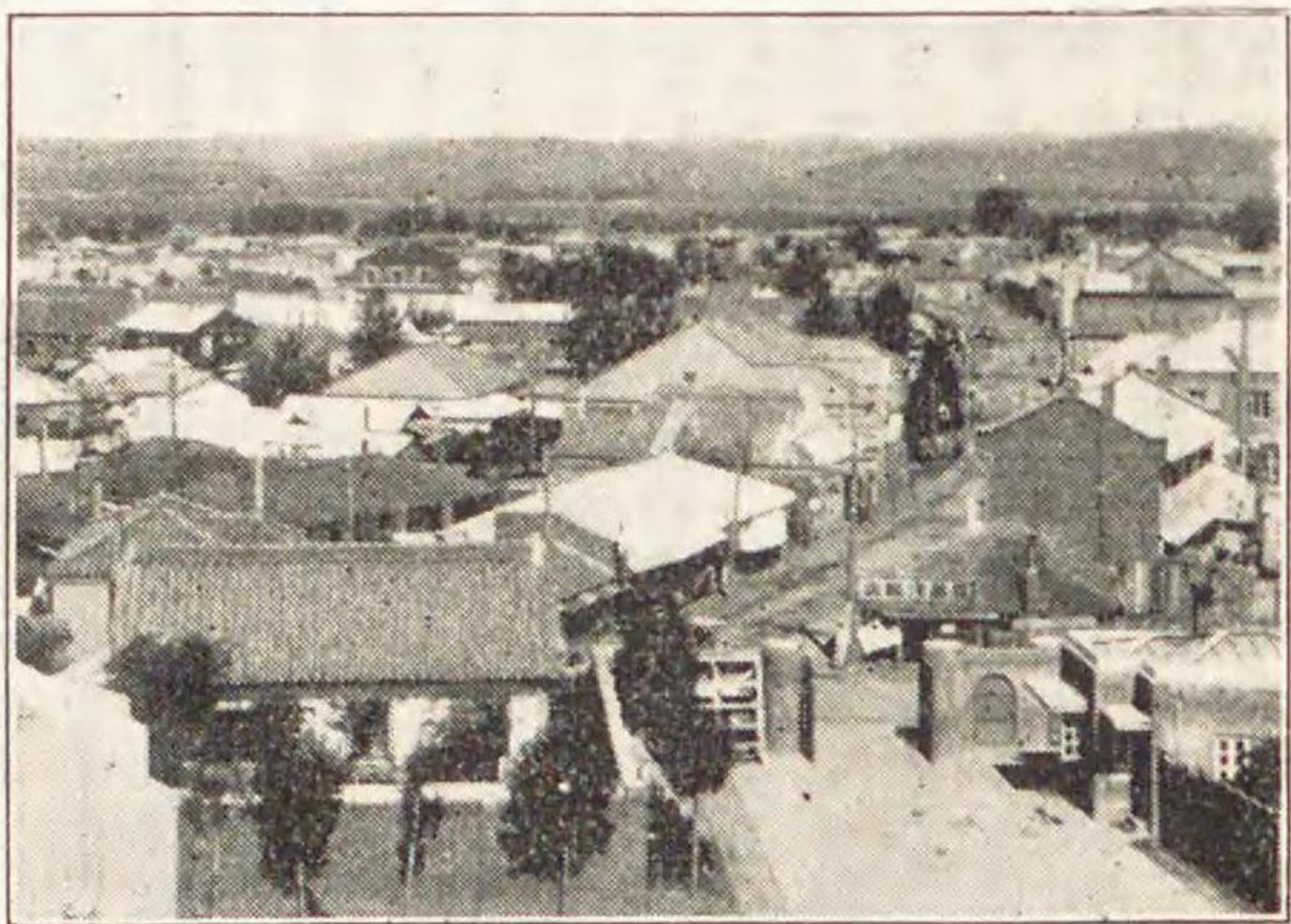
局子街は農産物の集散地として著名であるが、ここに集散する物産の主なるものは粟・大豆・大小麥・玉蜀黍・米等である。京圖線の開通後は附近の農地開拓と相俟つて、更に今後の發展が期待されてゐるが、現に人口一萬九千人である。

七 龍井村 [Lung-chieng-tsun]

吉林省東南部朝鮮國境に接する所謂間島の地で、宣統元年間島條約によつて通商地として開放された土地である。この地とは一名大道溝とも云はれ、五六十年前までは邊境の荒地に過ぎなかつたが、地味肥沃で農耕に適してゐるため、國境に近い朝鮮人の江を越へて移住開墾するもの漸次増加し、支那側もまた派辨所なるものを設け頻りに自國民の移住を獎勵したので、數年を出ずして遂に一市街を出現するに

至つた。

市街は南北に通ずる一條の支那街



間島龍井村の市街

と、不規則に連續する朝鮮市街とよつて成り、日本商埠地は領事館の東西

より北方にわたる一帯で、總領事館・公會堂・病院・日本居留民會・鮮銀出張所・東拓出張所・鮮人居住民會等がある。

この地方に於ける産物は大豆・大麥・小麥・粟・米及び木材等を主とし、殊に見るべきは水田の事業の發達で、所謂間島米なるものはその品質優良なる點に於て内地米に比して毫も遜色なしと稱せられてゐる。この地は間島貿易の中心地として商業もまた殷盛を極め、毎日二、七の日の開市は各種の物資が市場に現はれ、頗る雜沓する。戸數は約五百、人口は約一萬に近きものがある。

八 寧古塔 [Ning-ku-ta]

吉林省寧安縣の都邑であつて、史上に女眞の根據地として知られるところである。牡丹江上流はその東南を繞つて北流し、市街は大正四年火災のため



殆んど全部焼いたにも拘らず急速に復興され、今や外觀實質ともに比較的よく整頓した。然しこの地方は馬賊の跋扈地帯で、高粱繁茂期には牡丹江、寧古塔街道は勿論、市中すらも大部隊の襲撃を受けることがある。

この地の集散物資は小麦、大豆・粟・高粱・玉蜀黍・葉煙草等の農産物、黄花草・人蔘等の薬材、及び木材等で、加工品としては麥粉・豆粕・豆油・豆素麵・焼酒等で就中小麥は品質優良をもつて知られてゐる。人口約五萬を數へられる。

### 九 琿春 [Hung-chun]

吉林省の一都市、東部滿洲の中心市場である。明治四十三年通商地として開放されたが、商埠地としての設備を有してゐない。市街は東西二支里、南北一支里であつて、附近に産する穀物の市場である。油房・燒鍋・鐵工場・製

粉所・馬具・家具製造所等がある。人口約一萬三千人である。

### 一〇 佳木斯 [Chia-mu-szu]

吉林省の松花江岸にある都邑で、人口約一萬五千と稱せられ、商業頗る繁盛を極めてゐる。この地は清初樺川縣を置かれたが、後に現在のところに移轉されたのである。然し近年その發達著しきものがあるので、近く獨立して一縣を設けられる機運に向つてゐる。

この地は松花江畔の純然たる商港として發達した町で、人口こそ三姓・富錦等に劣るが、貿易額の點では寧ろ兩市を凌ぎ、大豆の移出は年額五千車、小麥は同江沿岸第一位で一千五百車に上つてゐる。昭和七年秋我が國の武裝移民團五百名がこの地附近に移住したことは周知の通りである。

### 一一 三姓 [San-hsing]

吉林省北部松花江と牡丹江の合流點

に位する都會であつて、一に依蘭又は依蘭哈達とも云はれる。往昔宋の徽宗皇帝が金に囚はれ崩じたところである。元及び清初には地方族長を三姓管領として統治せしめ、康熙四十五年築城し駐防兵を置き、雍正十年副都統を置いたが、光緒八年三姓廳と改め、次で依蘭府とし、降つて民國二年に依蘭縣を置いた。その三姓なる名稱については、努、克、祐の三族に因んだものと云はれてゐる。この地は明治三十八年の日清條約によつて商埠地として外人に開放されたもので、現に人口約二萬を有し、哈爾濱以東の松花江岸に於ける最大都市として整頓し、且つ埠頭としても最も重要な地位を占め、商業頗る繁盛である。この地を集散地とする物資は大豆・小豆・高粱・小麥・粟・草煙草・麻・木材等の農林産品及び毛皮・魚類・眞珠・砂金等で、その大宗品

は小麦・豆類の約四十萬石であり、哈爾濱・ハバロフスクその他露領地方へ輸出され、毛皮類木材等は牡丹江上流より來集し、哈爾濱方面へ移出される。工業としては燒鍋(燒酒製造)の約五十萬斤と豆油の三十萬斤を主とし、その他製粉・染房等で特に記すべきものはない。

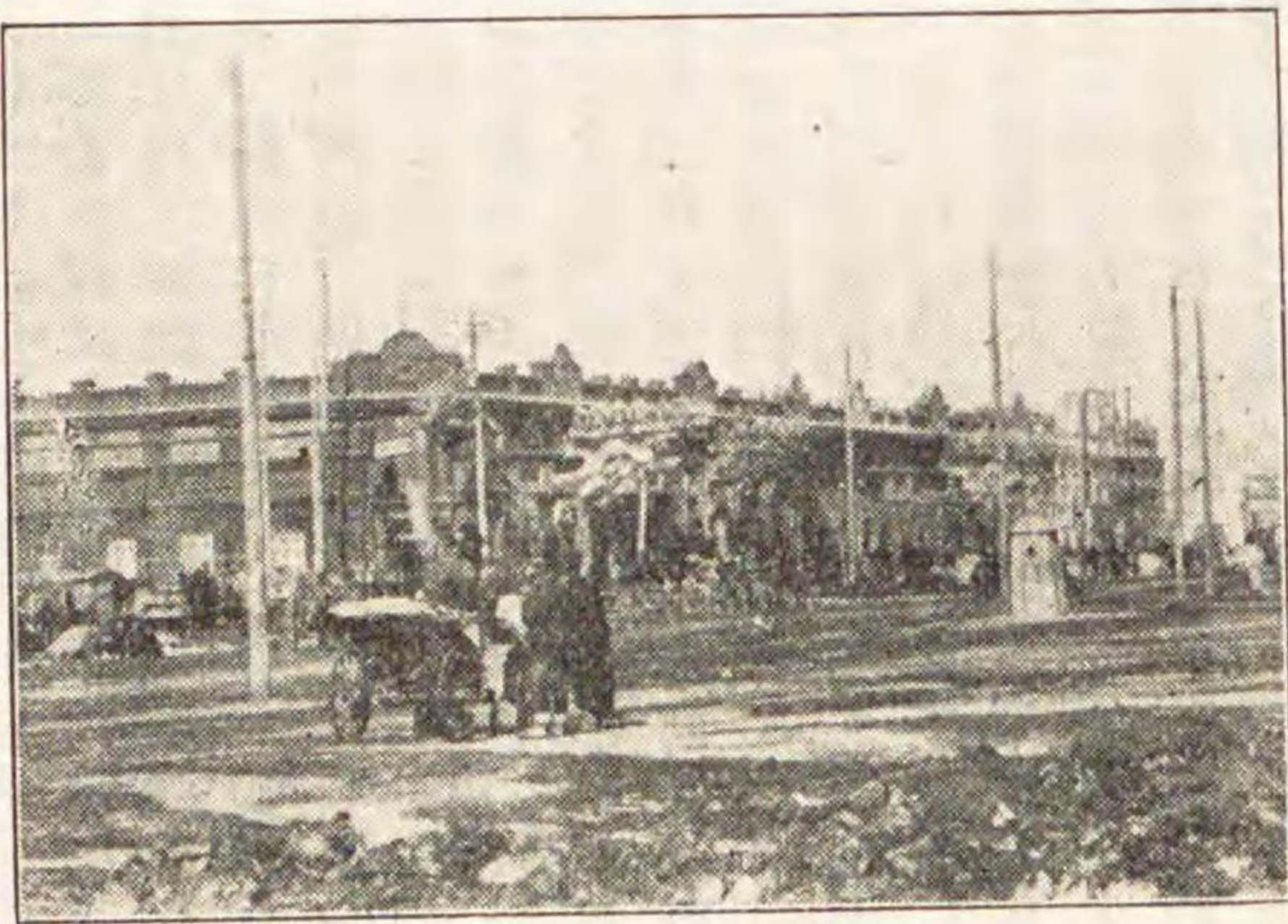
### 第三節 黑龍江省

#### 一 齊々哈爾 [Chi-chi-ha-erh]

黑龍江省の首府で、別に舊名を用ひト魁とも云ふ。最初は璦琿、墨爾根等と同様に軍事上の必要から建設された城である。即ち清朝の康熙二十八年ロシア帝國の北邊侵略を防衛するため副都統を設け、黑龍將軍に屬せしめ、同三十八年將軍を北方墨爾根からここに移駐せしめ、ここに初めて黑龍江省の省城となつたものである。光緒三十三

年將軍を廢して巡撫に改め、同三十四年黑水廳を昇格して龍江府としたが、民國二年縣に改置されて今日に至つたもので、その外國との貿易市場として開放されたのは明治三十八年十二月の日清條約附屬協約に依るものである。この地は哈爾濱を西に距ること約二百四十哩の地點に當り、また古來黑河に至る驛路に當り、西は海拉爾、南は伯都訥に通ずる交通上の重要地點である。市街は嫩江の左岸に位し、繞らする二重の城壁をもつて、南北約二哩、東西一哩餘、大小西門及び南東北の五門を有するが、破壊して原形を失つたものが多い。人口は内外城を合せて約七萬を有し、商業は多く外城に於て行はれ、内城は官衙・住宅地となつてゐる。

敘上の如く元來主として軍事上の目的から建設された都市であり、且つ四



齊々哈爾の安達站四道街



里、南方は蒙古一帯の廣大なる物資の供給及び消費地を控えてゐるが、興安嶺の開発は未だ充分ならず、且つ昂齊線によつて東支鐵道と通ずることとなるが故に、近代的商業地としては交通の圓滑を缺き、前記奥地の物資は哈爾濱・守達・滿溝等に直接搬出される状態で、商業地としての條件に缺けるところ多く、政治及び軍事的以外に都會としての成立の要素を有せず、經濟的には單なる消費地である。

## II 伯都納 [Potuna]

黑龍江省扶余縣の首都で、一に扶余とも云はれ、縣公署の所在地である。第二松花江の右岸に位し、肇州・農安・德惠・榆樹・雙城の諸縣と江を隔てて隣接してゐる。往時は對蒙貿易の中心地として、又物資の中繼集散地として殷盛を極めたが、東支鐵道開通後は黑龍江省方面に於ける物資の流動系統に變

化を來したることと、鄭家屯・洮南府の發展に從つて對蒙貿易に對する地位に動搖を來し、以前の倂がない。然し水陸交通の要衝に當り、夏期は埠頭に帆檣林立し、冬季結氷期間は馬車の往復連絡驛として盛んな光景を呈してゐる。

市街は城内と城外に分れ、城内は土壁をもつて圍繞され、城門は東西南北の四門がある。集散物資は農産物、畜産物の外に、三岔河一帯からの水産物がある。又決製品・藍・麻・葉煙草等を出す。商業は雜貨店が多く、營口、安東・奉天・哈爾濱等が仕入先であつて、主として外國品である。又大賚・肇州・鎮東・安廣等に販路を有する。工業は製粉・製油・燒酎醸造・製絲・豆素麵製造・毛皮類・製絨等主として舊式工場によつて製造されてゐる。人口は約四萬八千人である。

## III 黑河 [Hei-ho]

黑龍江省北邊黑龍江岸、瑗瑗の上流約四十軒に位する都會である。この地は前清咸豐八年の瑗瑗條約により、黑龍江左岸の地をロシアに割譲すると共に、露人に蹂躪された地方の開発につとめ、且つ將來商業地として發展の可能性を察し、ウラヂオストークに於ける山東人を招致してその振興に盡さしめ、また劇場その他の娛樂機關を設けて對岸なるブラゴヴェーシチェンスクに於ける自國採金労働者の消費地とし、また自領金鑛に對する物資供給地たらしめたため急速なる發展をとげた。

現に人口約二萬、民國元年大火後、市街地に於ける家屋は制限令を設け建設せしめたため北滿稀に見る整へる街容を有し、商業殷盛である。即ちその商業範圍は露領ブラゴヴェーシチェンスクのみならず、遠くイルクーツク方面

にまで及び、その輸出貿易は益々盛況に向ひつゝある。



水流の期春江龍黒の近附河黒

尙ほ該地方に於ける産物としては第一に砂金を擧ぐべく、その年産額は實に一千萬圓に達し、殊に近く十年來異常の發達を示し、就中、逢源公司は最も優良なる成績を擧げてゐると稱されてゐる。

## IV 呼蘭 [Hu-lan]

黑龍江省の都邑であつて、頗る交通の便に恵まれ、一は呼蘭河により、一は呼海線を有し、また陸路は四方に通じ、所謂四通八達である。従つて市内は家屋櫛比し商業頗る殷盛を極め、その人口三萬三千を擁し、近年綏化、海倫等の繁榮による影響を受けたりとは云へ、實に北滿屈指の大都市として恥かしからざるものがある。この地を集散地とする物資の主なるものは大豆、高粱、粟、小麥、大麥、玉蜀黍、陸稻等併せて六十萬石の巨額に達し、従つて糧棧(穀物問屋)の如きも七十戸の多

きに達してゐる。工業は滿洲在來の製粉・製油・醸造等業等である。

## V 海倫 [Hai-lun]

黑龍江省東南部、呼海線の終端に位する縣城で、俗に通肯とも云ふ。その縣治を布かれたものは民國二年で、現に人口二萬餘、豐饒なる開墾地を控へ、農産物の集散市場として著名である。市街は東西南北へ二條の十字街があり、商業殷賑である。機器・油房・燒鍋・製粉所がある。近時呼海線の開通を見るに及んでその穀類廻は愈々増加し、將來哈爾濱以北の都市として最も優越的地位を占めるに至るであらう。

## VI 愛理 [Ai-gun]

黑龍江省の商業中心地である。黑龍江城とも云はれ、内城外城の二部から成つてゐる。黑龍江の左岸、露領アムール州の首府ブラゴヴェーシチェンスク

工業は窯業・醸造・豆油・製粉・製革等各種に亙るが、大規模のものはない。



と對してゐる。清國の長髮賊の亂に惱み、外は英佛その他との交渉多く、大いに苦しめるに乘じ、シベリア總督ムラヴィヨフは清國に迫つて境界條約を締結し、黒龍江を境界とした。瓊瑣條約がこれで、實にロシアの滿洲侵略の端はここに開かれたのである。日清條約によつて商埠地として開放され、現に縣公署・税關の所在地であり、人口約六千内外を有するが、黒河にその繁榮を奪はれその衰微は蔽ふべからざるものがある。綿絲布・豆油・砂糖・燐寸・茶等の取引が盛んに行はれ、製粉工場・燒鍋・油房等がある。

#### 第四節 興安省

##### 一 海拉爾 [Haila-erh]

興安省の大都であつて、北滿鐵道西部線清洲里驛より東方約百哩に位置する。舊名を呼倫と云ふ。海拉爾河の支

流伊敏河の右岸に位し、その四圍は緩傾斜せる高地に圍繞された盆形をなした平野中にある市街である。市街は新舊二部から成り、舊市街は城内にあり、新市街は北滿鐵道附屬地である。その人口はロシア人約七千、支那人約五千五百、蒙古人約一千四百、内鮮人約百名、即ち合計一萬四千餘と稱されてゐる。この地は呼倫貝爾に於ける經濟的中心地として、蒙古貿易をもつて古くから知られたので、商業は頗る盛んである。移出貨物の主なるものをあげれば、毛皮・羊毛・羊・牛肉・鹽・曹達・乾草・魚類等で、その筆頭をなすものは羊毛で年額約八萬ブードに達し、鹽は年額約四百萬斤と稱せられてゐる。工業としては皮革・製粉・罐詰・防寒裝身具等が擧げられるが、皮革工場は大規模なものである。一はロシア人經營のもので、百三四十人の職工を使用して



海拉爾の白砂青松

四十人を使用し、主としてキツドの製革に従事し、生産能力二百枚と稱せら

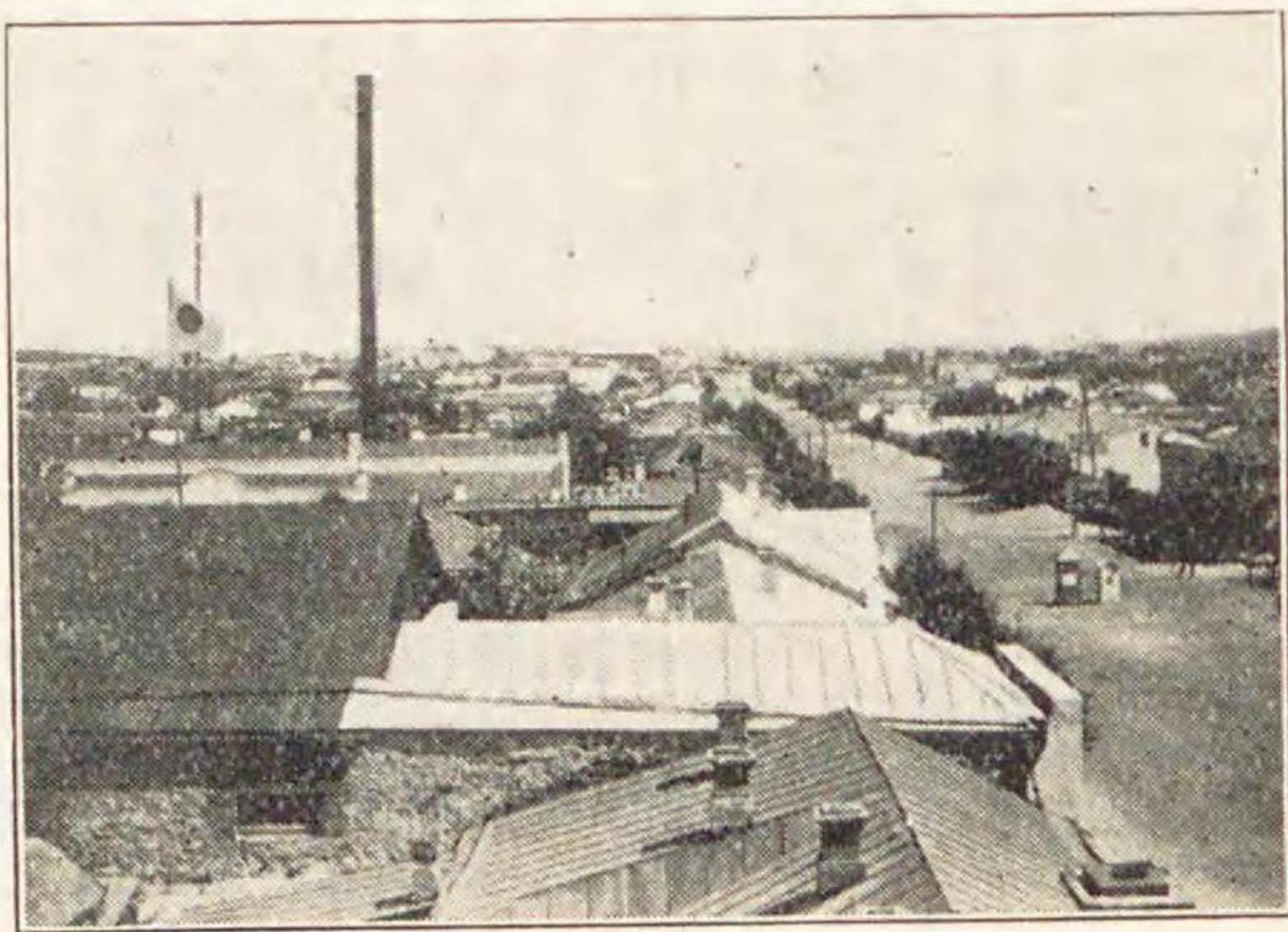
皮革は年産額二十五萬枚の製造能力を有し、他は蒙古人經營のもので、職工

れてゐる。

##### 二 滿洲里 [Man-shu-li]

哈爾濱を距る西方五百八十哩、滿洲の最西北端の茫漠たる高原に位し、北滿鐵道の起點たる滿洲里驛の所在地である。即ち光緒二十四年東支鐵道の建設されるやザバイカル鐵道南部線の終點、東支鐵道の起點驛として建設が行はれたのが今日ある端緒である。茲に於て光緒三十五年贛濱府を設置し、露清間の交渉事務及び開發邊防に當らしめたが、民國元年總官車和札を統領とする蒙古軍がロシアの援助の下に來襲し、支那官憲を放逐し車自らこの地の統領として海拉爾蒙古政廳の管下に歸するに至つた。然るに民國九年支那政府はロシア革命による内亂に乘じ、呼倫貝爾特別區域を設定し、この地に知事を置き今日に至つたのである。尙ほこの地は日露戰爭後日支滿洲協約によ

つて海拉爾と共に外國人の居住及び貿易地として開放され、宣統元年自治制



滿洲里二里街道の景

を布き、民國十二年市となつたのである。

市街地即ち東支鐵道附屬地としてロシアの租借せる土地面積は千七百十四萬坪、市街地三十四萬餘坪を有し、主要街衢は南北に通ずるもの八條と六條の横斷路とより成り、建築物は權してロシア風である。その住民は主として露支人で、戸數は二千三百、人口はロシア人約八千、支那人約五千、百數十人の日鮮人である。

商業は蒙古貿易を主とし麥粉、磚茶、粟、酒、煙草、布疋その他日用雜貨を供給し、同地畜産物たる獸毛皮の買付をなし相當盛んではあるが、概してロシア側の盛衰によつて左右される傾向があるばかりでなく、從來露支人の密輸入によつて榮えたが、近年國境監視が頗る嚴重となり、ために密輸出入は減退したが、同時に市場もまた沈衰傾向を呈するに至つた。その輸出品の主なるものは小麥・高粱・大豆その他豆



類・粟・落花生・野菜・果物等の農産物及び製品、並に羊毛・豚毛・家畜・その他畜産製品である。尙ほ昭和七年秋滿洲國反軍蘇炳文が在留邦人を監禁し暴虐を加へた事件があつた。尙ほ工業としては特筆に値するものを有しない。最後にこの地は四圍に頗る廣大にして肥沃なる未墾地を控へ、露蒙貿易に對し地理的好位置を占めてゐるから極めて有望である。

III 經棚 [Ching-peng]

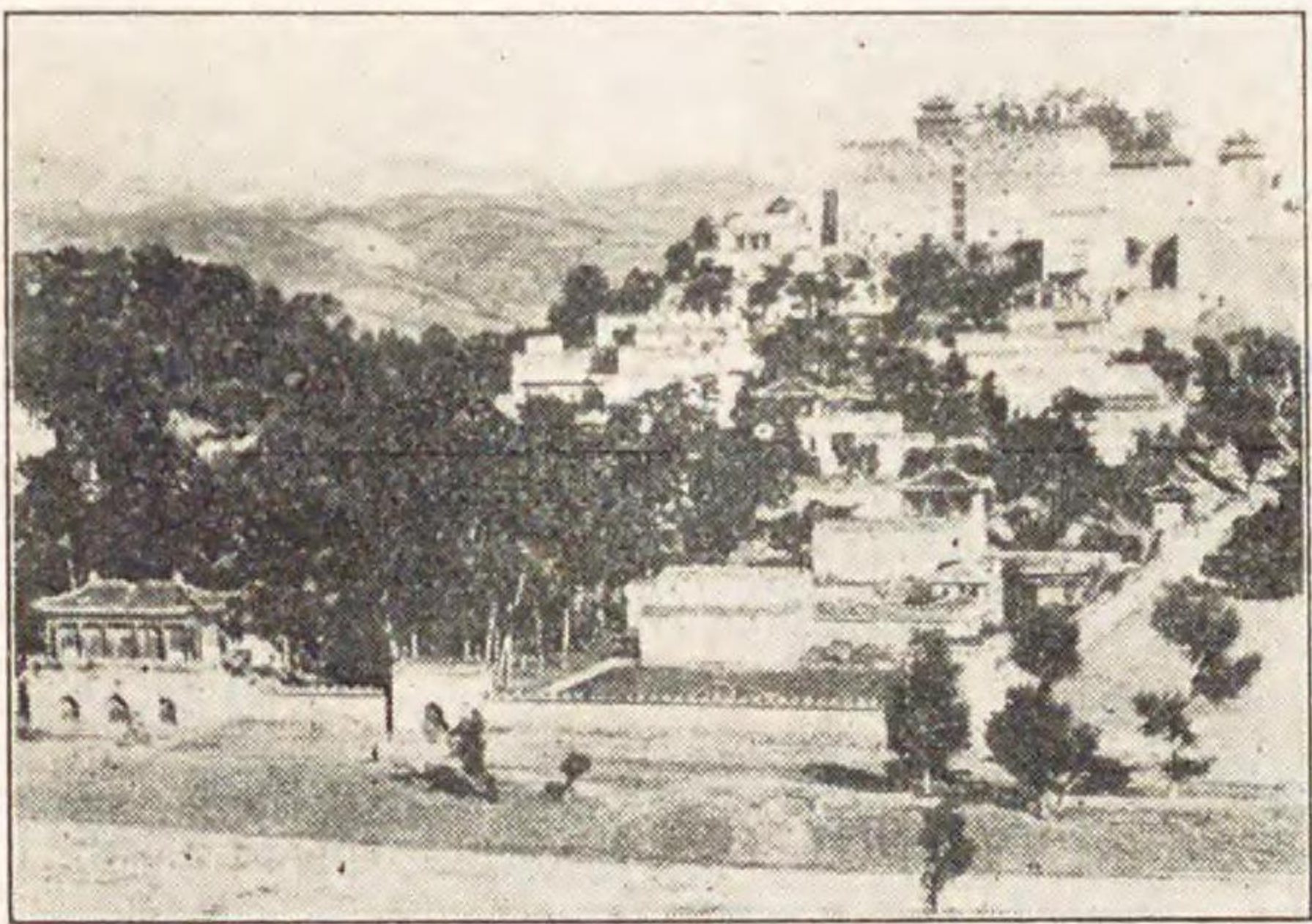
東部内蒙古昭和烏達盟中の最西部の興安嶺山脈と陰山山脈との交叉點の山岳險峰の地にある。康熙年間から蒙古貿易が行はれた。牧羊者と商品交換をなす者を主な住民とする。

第五節 熱河省

I 承德 [Cheng-te]

熱河省の省城で、一に熱河とも云ひ、

省の南部、北平の東北約百餘哩の地にある。古く漢代以後或は隸屬し、或は



景全の殿宮德承河熱

離れ、秦・金遼の版圖であつたが、明代には勢力が及ばなかつた。清朝に至

り、その雍正元年熱河廳が設けられ、後乾隆四十三年承德府と改め、全直隸蒙古を統轄したが、民國元年所轄州縣の獨立と共に縣に改められた。乾隆帝のとき離宮が置かれ、咸豐十年英佛聯合軍が北京に侵入するや、文宗帝は難を避けてこの地に蒙塵したことがある。國民政府に至り民國十八年熱河に省制を布くに及んで、承德はその省政府所在地となつた。

人口約二萬餘、古くから赤峰、朝陽等の各地より北京(今の北平)に通ずる要路に當ると共に、行政上の中心地且つ離宮の所在地として繁榮を極め、前清時代には實にその黄金時代を現出したが、元來商業地ではなく、清朝覆没後は王侯貴族の往來なく、不振の状態にある。市内商賈の主なるものは糧店・客棧・車店・炭店・錢換店・糧棧・驛局等で、その集散物資は高粱・粟・獸皮等

である。

II 赤峰 [Chih-feng]

熱河省に於ける最も重要な都市である。首府承徳の東北百十哩の英金河の南岸にあり、赤峰縣治の所在地である。赤峰の開けたのは今を距る二百年前、蒙古貿易に従事する漢人が侵入居を卜して貿易に従事したのが抑もの始めで、爾來商況頓に殷盛を極めたが、その後奉支鐵道の開通と共にその繁榮の一部を北滿に奪はれ、殊に清末蒙匪の搔擾常なく、市況は衰微したが、民國二年都統城をこの地に移し、又同三年中外通商地として開放を聲明するに及んで以來漸次復活し、今や東蒙に於ける最大物資集散場となつた。同市場を集散地とする甘草は頗る有名で、その正確な産額は知る由もないが、少くともその年額四、五百萬斤に達し、その半數は天津に輸送される。

現在の人口は約三萬餘、漢人七、滿人一、その他が蒙古人の割合である。

III 平泉 [Ping-chuan]

熱河と陵源との中位にあり、赤峰口・赤峰を貫く要路に當る。その市街は東北より西南に向つて長方形をなし、街衢は比較的整然とし、人口約二萬五千を算し、省内第二流の都市であつて、商業盛大である。集散物資の主なるものは薪炭・粟・高粱・家畜・皮毛等である。

IV 朝陽 [Chao yang]

熱河省の東邊、内蒙古と滿洲本部とを貫く大道路に沿ひ、大凌河々岸上にある。南北票炭産地として知られてゐる。現在滿漢蒙古各種族を併せて約四萬の人口を有し、商業は蒙古貿易をその生命とするが、錦州、營口等との關係も深く、これ等各市場と管内各地との取次商業も盛んである。

V 圍場 [Wei-chang]

熱河省の赤峰・承德・察哈爾省多倫諾爾の中間に位する人口約四、五千人の小都邑である。清朝時代官設の狩獵場の置かれたところで、住民は殆んど漢人で、附近物資の集散市場となつてゐる。

六 灤平 [Luan-ping]

承德より西南約十哩の地點にあり、熱河より北平に達する街道にある。市街の東部は灤河に臨み廣濶なる平野に面してゐるが、西南方面には山岳が連り、東に熱河を控へ、灤河上流より來る物資はそれぞれの地方に集積される結果、商業は殷盛なりとは云へない。牧羊者に衣食料の日用品を給し、畜産品を受け取る業務に當る商人の町で、人口約一萬人を算する。



### 第三章 關東州都市

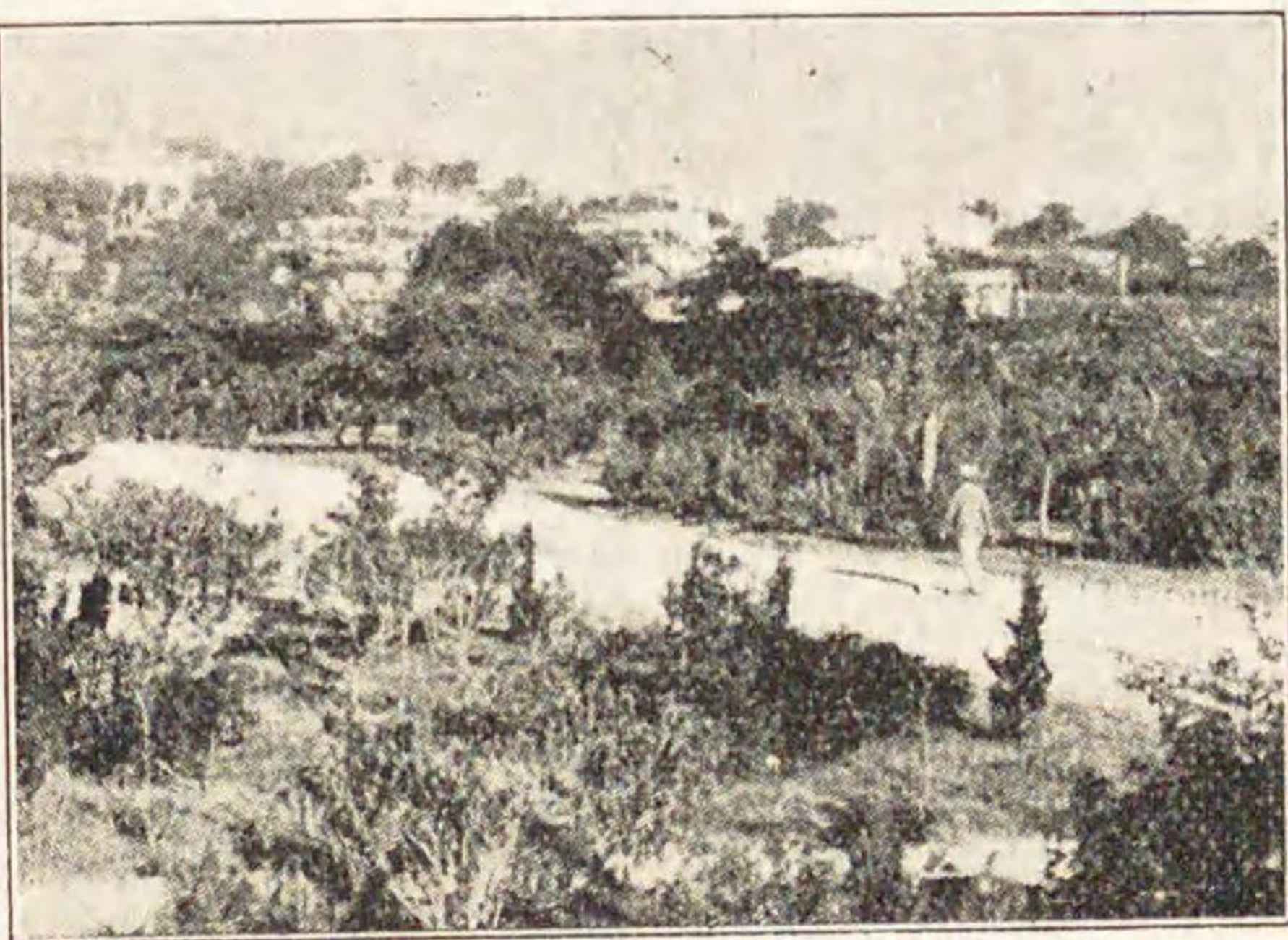
#### 一 旅順 [Lu-shun]

關東州の首府である。遼東半島の最南端に位し、風光明媚、山紫水明の形勝地を占め、老鐵山脈は市街の西方に當る老鐵山を名所とし、更にその餘脈は海中に點々たる廟島列島となり、遙かに對岸山東省と結び、旅順は山東省登州と共に渤海の關門を形成してゐる。

旅順は清の康熙四十年、即ち今より約二百年前から疾くも要害の地と目され、光緒五年には時の北洋大臣李鴻章の上奏によつて要塞地として指定され、軍港としての設備が備はつたのである。その後一旦ロシアの手に移つたが、我が國運を賭した日露戦争の結果として我國の手に讓渡されたのである。

。かくて曾ては東洋第一の堅塞として許された旅順の地は、一時海軍鎮守府を置かれたが、後ち要塞地と改められた。更にこれを廢し、今では滿洲唯一の避暑遊樂地として諸々の文化は完備し、且つ關東州の首府として、今日の樂園旅順を現出するに至つたのである。

市街は新舊二區から成り、四方は山を繞らし、東、北、西に互つて黄金山・大孤山・東鷄冠山・高崎山・海鼠山・二〇三高地等があり、西方は西鷄冠山を負つた老虎尾半島は新市街に額突いて海面をC字型に圍ひ、黄金山との間に港口を一筋の海峽に扼して天然の良港をなしてゐる。舊市街は東部を占め、白玉山、龍河を隔てて新市街に接し、黄金山下の東港に面してゐる。新市街は西港に面し、西方一帯を占めてゐる官衙學校街である。關東廳はここにあり、



旅順に於ける大正公園の翠

り、白堊の層樓が綠樹の間に聳えてゐる。諸官衙及び旅順工科大学・中學校・女學校・師範學堂・後樂園・大正公園等がまだ建物をもつて埋らない赭土の生

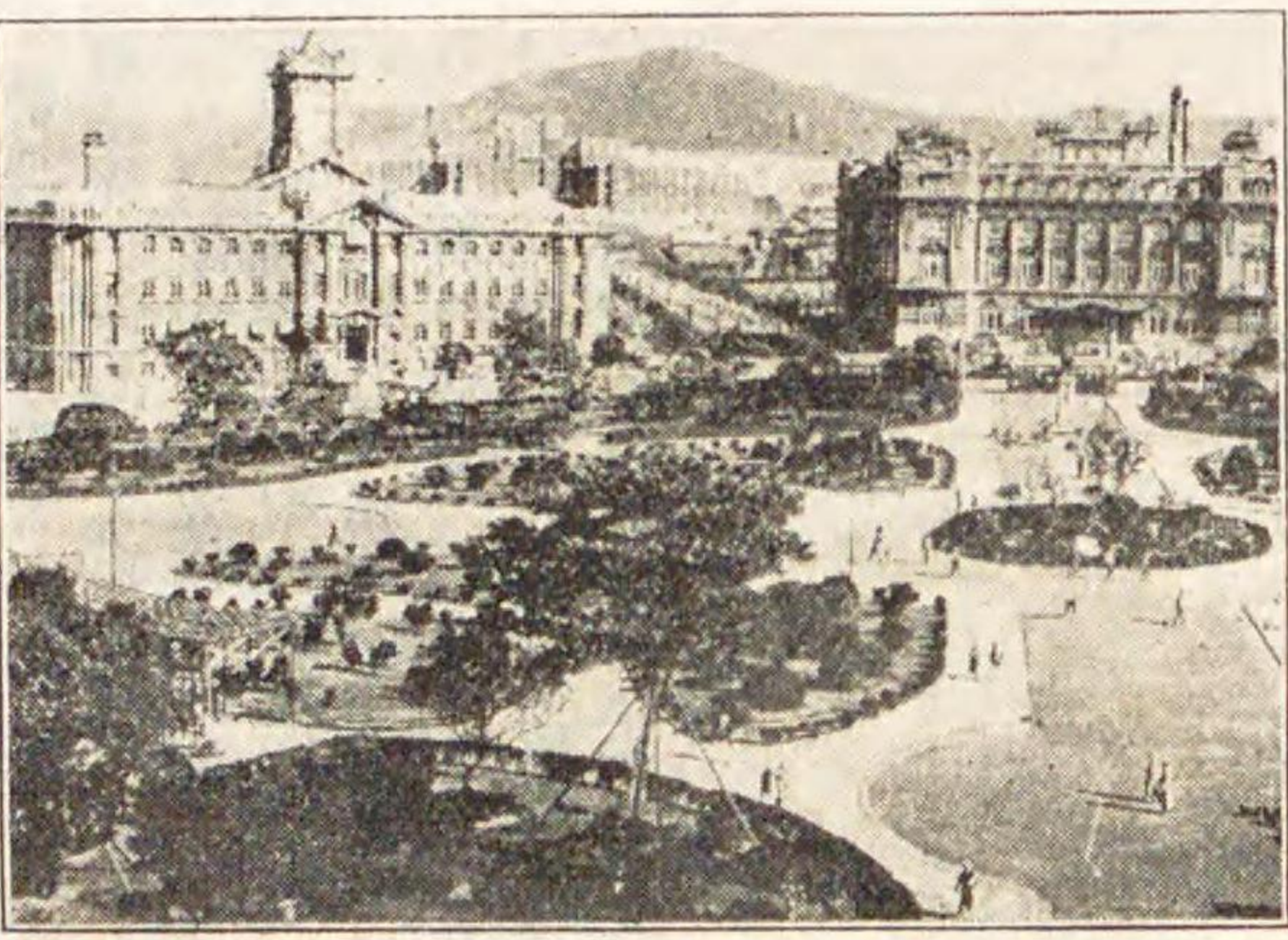
地を露出した閑靜な市街を點綴してゐる。港は要港部の所管であつて、東西二港に分れ、西港は東西二哩、南北一哩の悠寛たる海港であるが、港内水淺く、大船の出入に不便である。西港は狭小であるが水深く、軍港として防備されてゐる。旅順港は山東の萊州、煙臺と相對し、古くより支那海軍作戰上の要衝として認められ、清の康熙三十五年この地を根據地とした。日露戦役のをり乃木・ステツセル兩將軍の會見地として名高い水師營は當時の遺跡である。現在人口は二萬九千四百三十人、日本内地人は、約一萬二千人である。

#### 二 大連 [Talien]

大連は現在に於ては滿洲鐵道の起點として、歐亞連絡の關門として、また極東に於ける有效なる貿易地として世界的に名を馳せてゐるが、今より約三

十年前までは遼東半島の寂寞たる漁村に過ぎなかつたのである。即ち當時は東西青泥窪及び黒咀子の地であつたが、かの三國干涉後代償としてロシアの遼七半島を租借するや、ロシアは遠大なる極東侵略地點として、旅順の軍港に對し、大連は經濟港として其々經營大に努めたのである。然るに日露戦争の結果として我國に讓渡されることとなり、我國は爾來拮据經營、海陸の便を開き、各般の文明的設備を施し、遂に今日の隆盛さを見るに至つたのである。

大連は近代滿洲の正支關に當り、豊富なる滿蒙物産の大多數はこの港に集積され、三千萬住民の需要品の最多數は一旦この地に陸揚げされ更に各地へと轉送される。日本内地、朝鮮、支那本土、歐米各港への航路はこの自由港を中心として、蜘蛛の巣の如く八方に



近代的大連市の廣大の場

擴げられてゐる。市の南方は黃海に臨み、西は旅順を望み、東北は直にアジ

ア大陸に展開する。南滿洲鐵道はこの地を起點として延び、奉天・安東・四平



街・新京等に於て朝鮮・支那各地・蒙古・シベリア・歐洲各地にそれ／＼聯絡してゐる。

市街は大連灣に沿つて東西七軒八餘、南北二軒九餘、長方形に延び、延見臺一圓の高地を肩盤として兩翼を延べ、東部本市街は東廣場を、西部新開地は沙河公園一帯を中心として判然二分されてゐる。住宅地區、混合地區、商業地區、工業地區の別があつて、滿洲人は商業地區に於て全然日本人と雜居してゐる。住宅地區は市の南方丘陵の高地に沿ひ、南山麓、中央公園一帯、伏見臺、譚家屯、聖德街、南沙河口等約百四十萬坪を割當てられてゐる。他にロシア人の建設した小市街ロシア町があり、主として滿鐵會社の社宅地に當てられてゐる。商業地區は浪速町を主とし、伊勢町、大山通、山縣通等があり、奥町一帯は大規模の支那商賈が

軒を並べて居り、全地域は五十二萬餘坪である。猶ほ混合地域としては百九十二萬坪、工業地域としては八十八萬坪を割當てられてゐるが、この他に郊外の市に編入されたものや、滿鐵用地、區外地、山地、公園地等合計二平方里餘がある。街路は放射線狀であつて、市の東部中部に大廣場があり、十條の大道路がここから放出し、この四方には東・西・南・千代田・朝日・吾妻・寶等の中廣場があり、八條乃至三條の道路を放出し廣場と廣場を幹線路をもつて連絡し、更に外郭を大小道路にて圓形に連絡し、その狀宛かも蜘蛛の巢に似てゐる。

大連は前述の如く滿洲輸出入貨物の吞吐港であり、従つてまた經濟的中心地たるの權威を有するのである。その輸出品の主なるものは、滿洲特産たる大豆を首位に、豆粕・豆油・高粱・石炭・

鐵及び鐵製品及び畜產品等で、輸入品の主なるものは麥粉・線織物・麻袋・鐵・鋼・機械類等である。また工業は滿鐵鐵道關係の沙河工場の大規模なる機械及び鐵道用具の製作は勿論、電氣作業所、瓦斯事業、中央試驗所、窯業等が行はれ、この他滿洲特産品を原料とする油房業の如き大小約六十工場を有し、その一年間に於ける生産額は豆粕二、三百萬枚、豆油一億數千斤に達する。

第三十篇

自然

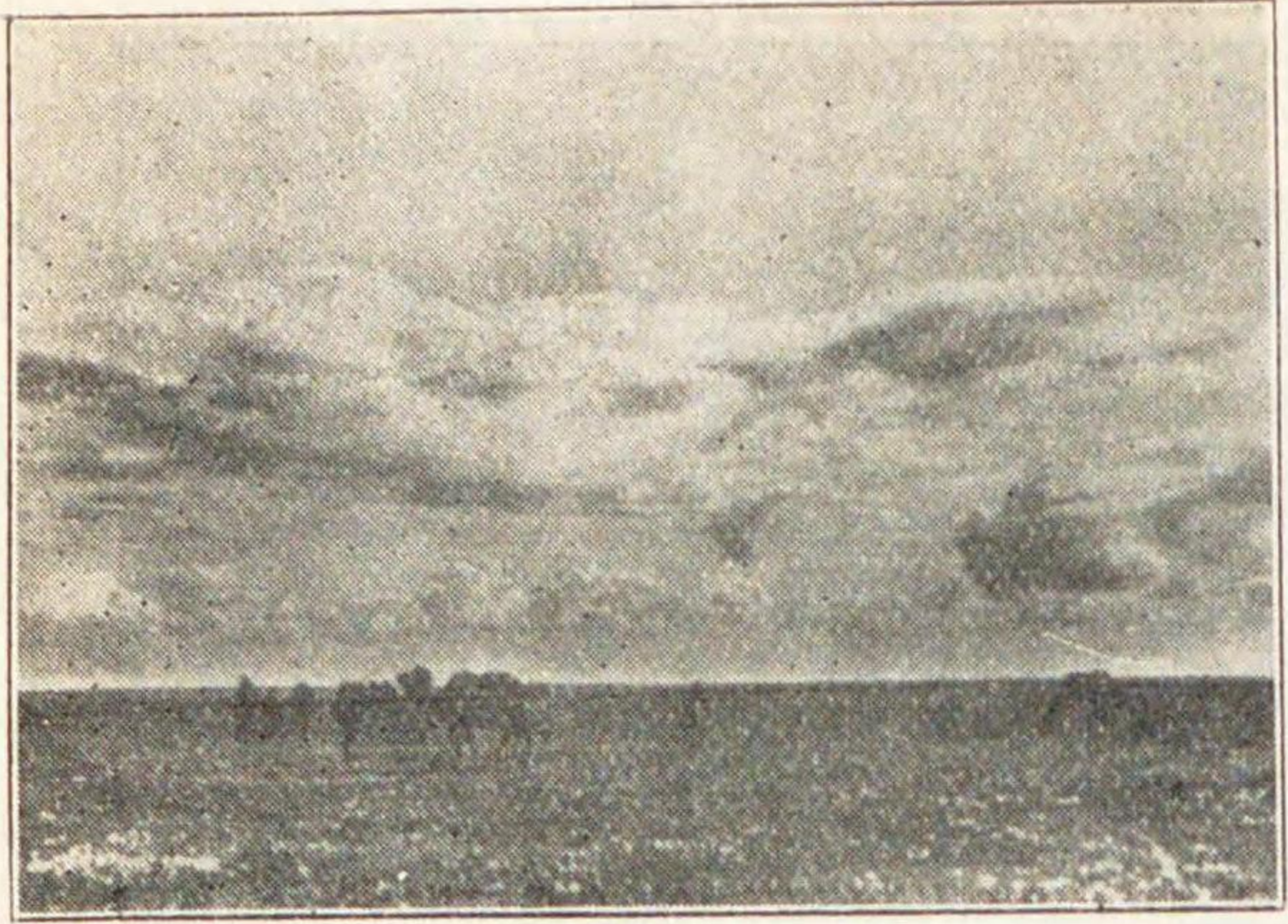


第一章	自然
第二章	國土
第三章	戶口
第四章	動物・植物



# 第十三篇 自然

## 第一章 國土



茫 漠 北  
野 沃 の 滿 北

第十三篇 自然 第一章 國土

### 一 位置

滿洲國は亞細亞大陸の東北に位し、西部は中華民國察哈爾省及び外蒙古に連り北部及び東部は黑龍江及び烏蘇里江を距てて西伯利亞と相對し東南部は圖們江及び鴨綠江により朝鮮と劃せられ、南部は黄海及び渤海に臨み西南は萬里の長城を境として中華民國河北省に接してゐる。

### ◇疆界

方位	主要疆界線	疆域
西 界	黑龍江	蒙古
北 界	烏蘇里江	西伯利亞
東 界	圖們江及鴨綠江	朝鮮
東南界	朝鮮	黄海及渤海
南 界	萬里長城	中華民國河北省
南西界		

更に之を數字的に觀察すれば、西は東經一一五度二〇より起り、東は東經一三五度二〇分に至り、南は北緯三八

度四〇分より發し、北は北緯五三度五〇分に達し、その周圍實に七、八九軒に及んでゐる。

### ◇經緯度

方位	經緯度	地名
南 起	北緯 六度四分	關東州
北 至	北緯 五三度五分	黑龍江省漠河縣
西 起	東經 一三五度二分	興安北分省新巴爾虎右翼旗
東 至	東經 一三五度二分	吉林省撫遠縣

### 二 地勢

地勢はその形狀略ぼ東西南北を四つの頂點とする四邊形をなし、その四邊には夫れ夫れ山脈又は海灣横はりその内部に大平野を展開する。

山脈は北東より南西に走るものを主とし、北西より南東に横はるものを副とする。前者に屬するものは四邊形の北西邊をなす。大興安嶺山脈と南東邊を走る長白山系とで、後者に屬するも





天朝山 (熱河省)

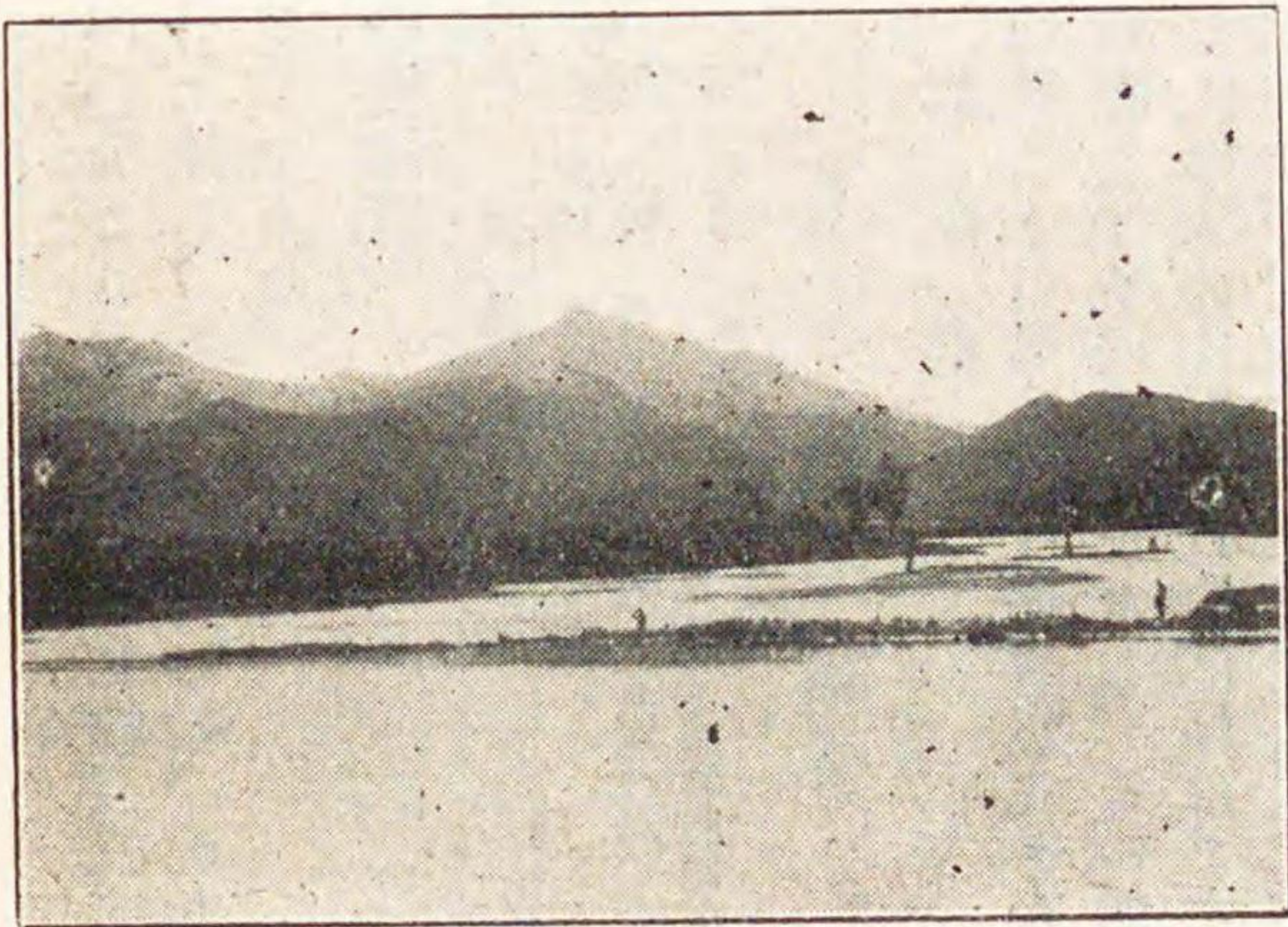
のには、北東邊をなす小興安嶺山脈と、南西邊に横はる松嶺燕山の二山脈とがある。

◇主要山脈

山脈	走向
長白山系	北東→南西
大興安嶺山脈	同
小興安嶺山脈	北西→南東
松嶺山脈	同
燕山山脈	同
	南東邊
	北西邊
	北東邊
	南西邊

河川は日本海に注ぐものと渤海及び黄海に入るものとに大別される。前者に屬するものは

- (1) 源を大興安嶺山脈に發し、大小興安嶺山脈の外側を流れる黒龍江。
- (2) 源を長白山脈の白頭山に發し吉林を過ぎて平野に出て扶餘の附近で急に北東に屈曲し哈爾濱を過ぎて黒龍江に合する松花江。
- (3) 小興安嶺山脈の北部より起り齊々哈爾附近の草原を南流し扶餘の附近にて松花江と合する嫩江。
- (4) 西伯利亞錫赫特山脈の南部より

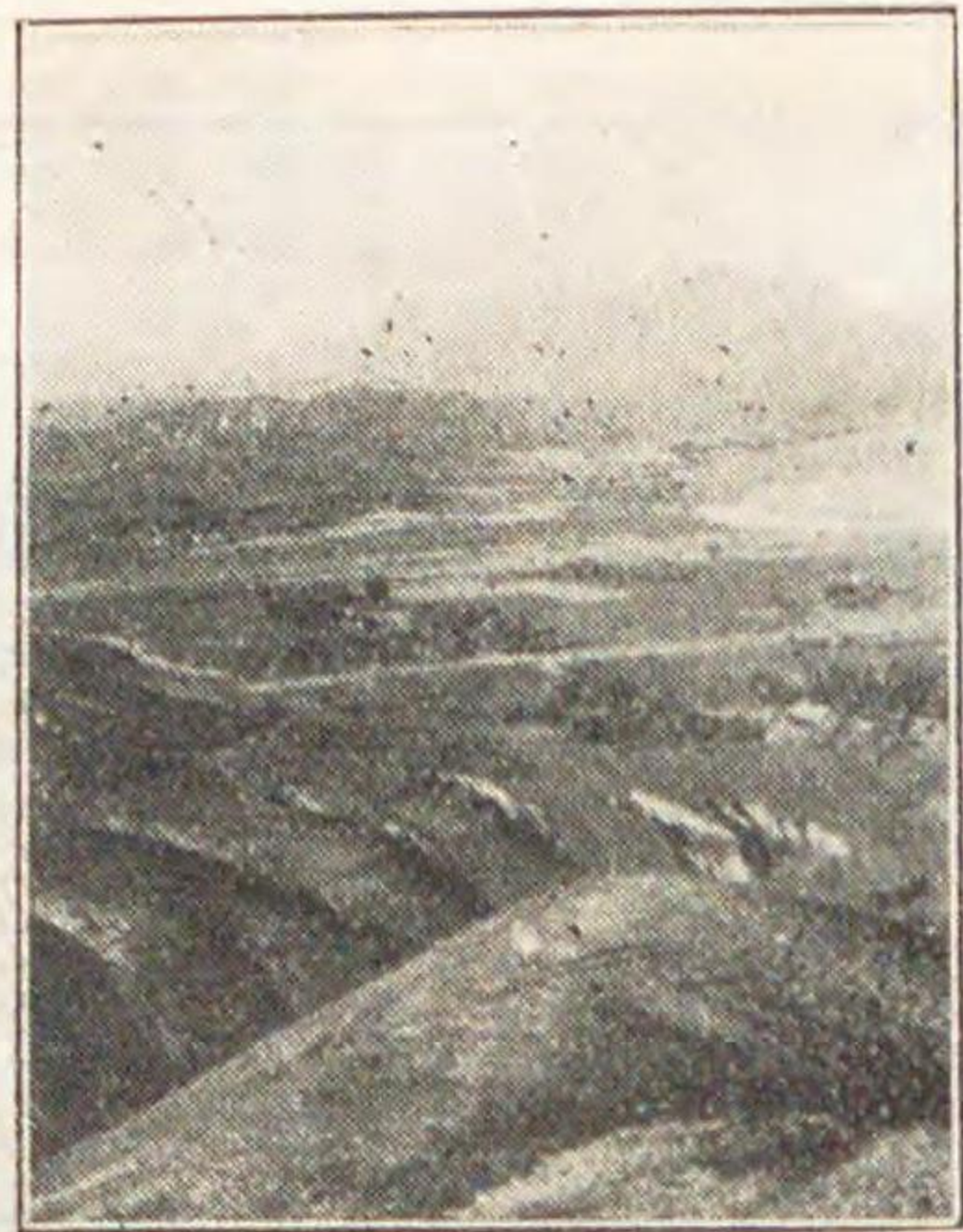


莊河附近

出て吉林省の東部と西伯利亞との境界を北流し黒龍江に合する烏蘇里江との一系統。  
(5) 源を白頭山に發し吉林省の東南と朝鮮の境界を東流する圖們江の二

系統を擧ぐ。

- 後者に屬するものには
- (6) 源を白頭山に發し奉天省と朝鮮との境界を西南に流る鴨綠江。
- (7) 大興安嶺山脈の南部に源を發し熱河省興安西分省の境界を東流し鄭家屯附近で急に南曲し營口の下流に



承德附近 (熱河省)

て遼東灣に注ぐ遼河。

- (8) 燕山山脈より出て承德の附近を

◇主要河川

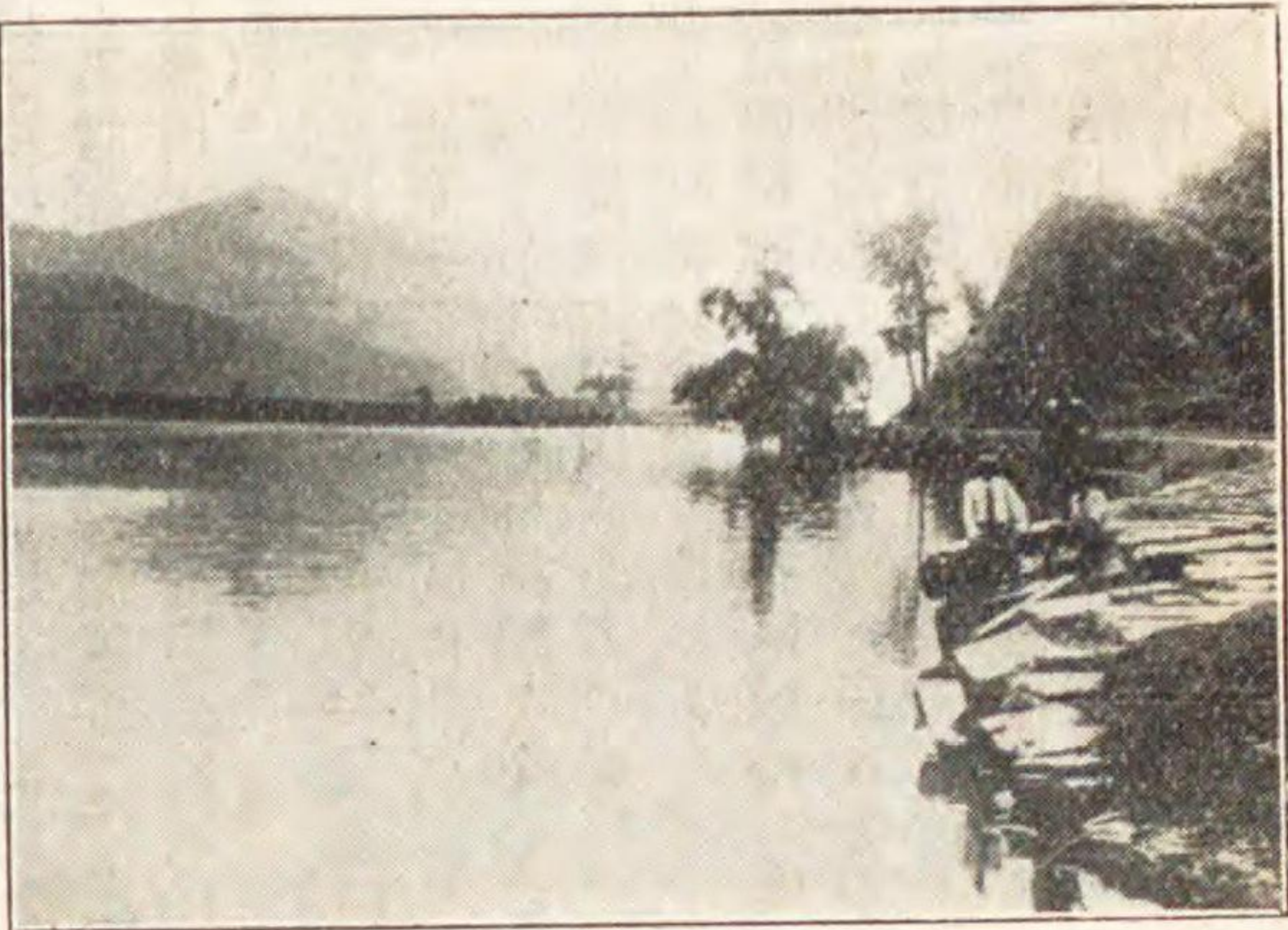
河川	發源地	流域	尾闈
黒龍江	大興安嶺山脈の北部	大小興安嶺山脈の外側	日本海
松花江	長白山系の白頭山	吉林、扶餘、哈爾濱	黒龍江
嫩江	小興安嶺山脈の北部	齊々哈爾附近の草原	松花江
烏蘇里江	西伯利亞錫赫特山脈の南部	吉林省と西伯利亞境界	黒龍江
圖們江	長白山系の白頭山	吉林省と朝鮮の境界	日本海
鴨綠江	同	奉天省と朝鮮の境界	日本海
遼河	大興安嶺山脈の南部	興安北分省と熱河省の境界、鄭家屯、營口	渤海
	燕山山脈	承德、中華民國、河北省	同

南東に流れ中華民國河北省を経て渤海に入る遼河等を數ふることが出来る。

◇主要湖沼

湖沼	位置	置	東西	南北
興凱湖	吉林省の東部と西伯利亞の境界		五〇軒	九〇軒
鏡泊湖	吉林省の中部		八軒	四〇軒
呼倫湖	興安北分省の西北		一〇軒	二〇軒
貝爾湖	興安北分省の西南と外蒙古の境界		七軒	三二軒
大布蘇諾爾	奉天省の北部		八軒	八軒





新 濱 附 近

湖沼は土地の廣い割にその數極めて少く、吉林省の東部と西伯利亞との境界に跨る興凱湖、吉林省の中部に位する鏡泊湖、興安北分省の西北にある呼倫湖、興安北分省の西南と外蒙古との

境界に横はる貝爾湖等に過ぎない。然し、西部地方には雨季一時的に構成される所謂、Playas 式小湖が少くない。奉天省の北部に構成される大布蘇諾爾はその代表的なものである。(右表)終りに海岸線を見るに延長僅か七〇〇軒、國土周圍の十一分の一強に過ぎない。然かも黃海沿岸は北東より南西へ略ぼ一直線をなし屈曲少く、沿岸には二乃至六軒の幅の所謂沿岸洲があり、水浅く海岸としての價値が少い。渤海沿岸は前者に比べ海岸線長く屈曲に富み遼河江には著名な營口港があり、又連山灣には不凍港葫蘆島を控へて海岸として有望なりと云ふことが出来る。

三 地 質

山地又は高原は始原代及び古生代古紀の岩層がその主要部分をなし、松花江、遼河等の流域の平野は新生代の第

四紀層から成り、古期と新期の地層多くその中間の中生代層の發達は比較的少い。

始生代層は撫順附近の渾河以北柴河流域地方から鴨綠江上流方面に及び又松花江上流地方より間島地方に至る一帯の地域に分布する。

原生代層は大連、旅順附近の山地より關東州の北東部に擴り、尙普蘭店以北の滿鐵線の西方、蓋平の南東より鞍山附近一帶の山地、安奉沿線橋頭地方、鴨綠江中流域の一部にも發達する。古生代の寒武利亞紀層は南部に廣く分布し就中金州南山附近・三十里堡・復州城より南西方長興島、五島等によく發達する。又大石附近より北東方に延長し、更に安奉線太子河以南に出る。奥陶紀層は復州五湖嘴を始め太子河沿岸の諸炭坑・煙臺・東溪湖・牛心臺・田師付溝等の附近に分布する。

石炭及び二疊紀層は太子河の上流地方に局部的盆地狀をなして發達し又輝法河左岸の様子哨附近及び同河と松花江との合流點にも少し分布する。

中生代層としては侏羅紀層が僅に發達するばかりで間島地方、新京南東方の石牌嶺・陶家屯・鐵嶺附近・渾河上流・營盤附近・炸子蜜附近等小區域に分布する。

新生代の第三紀層もその分布廣くなく、新京と吉林の中間に北東より南西に互つて發達する外撫順を中心とする渾河下流地方、伊通西方の炭坑、吉林北東の紅窩炭坑附近等にある。

第四紀層は其の分布區域稍、廣く、洪積期層としては丘陵・段丘等の砂礫層及び平原窪地等に堆積する黃土層等あり、沖積層としては各河川流域の砂礫・粘土等がある。

以上水成岩層の外に火成岩層も稍、

◆ 奉 天 省

縣 別	面 積	縣 別	面 積
全 省	一、九七、五三、七〇	恒 安 縣	四、二八、〇六
遼 陽 縣	三、三六、三三	通 遼 縣	三、八九、四二
撫 順 縣	二、二五、七六	安 東 縣	三、三九、〇六
遼 寧 縣	五、三〇、三六	開 通 縣	四、七九、四四
營 口 縣	三、四四、〇二	雙 陽 縣	四、〇七、七六
海 城 縣	九、七、二〇	遼 源 縣	四、二七、九四
蓋 平 縣	三、四七、三六	遼 寧 縣	五、四六、九一
復 遼 縣	四、五五、三三	通 遼 縣	二、〇五、五五
莊 河 縣	四、二〇、〇六	彰 武 縣	二、五九、五五
岫 巖 縣	三、〇〇、五五	新 民 縣	二、三〇、三三
鳳 城 縣	六、二五、三三	遼 中 縣	五、二九、八三
安 東 縣	一、四四、九一	遼 寧 縣	三、六六、〇〇
寬 甸 縣	四、五九、九一	盤 石 縣	二、四三、九一
本 溪 縣	五、五九、三三	黑 山 縣	二、〇〇、四一
興 京 縣	五、四〇、七五	北 鎮 縣	三、六五、五五
柳 河 縣	三、三五、五五	錦 州 縣	二、九二、〇六
海 龍 縣	二、八六、六六	錦 州 縣	二、四七、〇六
輝 南 縣	一、六四、八四	興 城 縣	二、四七、〇六
金 輝 縣	四、〇三、〇八	緜 甸 縣	一、九七、四四
		綏 中 縣	一、六六、五八
		綏 化 縣	二、〇六、七四



廣く分布する。

四 面積

面積に關しては未だ嘗て全般的の測量行はれたことがなく従つて精確な數字を表示することが困難だとは云へ、今大勢を知るに大同二年六月末日現在に依る民政部及び興安總署の推定面積を摘録すれば左の如し。

全 國	一、四六、〇九二・七	平方料
奉天省	一九、七五三・七	
吉林省	二六、六九六・五	
黑龍江省	四一、二九三・七	
熱河省	一五、〇〇六・七	
北滿特別區	八七・七	
新京特別市	一九一・〇	
哈爾濱特別市	九三・一五	
興安東分省	一〇四、〇五六・八五	
興安南分省	六、五二・五	
興安西分省	五、七五・〇	
興安北分省	一八五、〇六五・〇	

◇黑龍江省

縣別	面積	縣別	面積	縣別	面積
全省	四一、二九三・七	德都設治局	六、四四・七	鐵道設治局	四、九九・九
龍江縣	一三、五七・五	克東縣	七、六八・八	東興縣	二、五五・六
甘南設治局	六、〇九・〇	拜泉縣	一〇、一三・七	木蘭縣	二、九四・九
景星縣	二七、三三・三	明水縣	九、四四・七	通河縣	八、八九・六
泰來縣	五、七三・三	青水縣	三、四四・七	鳳山設治局	五、〇〇・八
大慶縣	三、七二・五	安遠縣	六、二五・〇	湯原縣	一、八四・三
泰康設治局	八、三三・〇	肇州縣	六、八四・〇	綏濱縣	五、五七・〇
林甸縣	二、七九・七	肇東縣	三、三五・五	佛雲縣	二、八八・〇
富祿設治局	一、五二・三	巴彥縣	二、八六・九	烏雲縣	二、四八・〇
依安縣	四、四〇・四	望奎縣	二、三五・七	遼河縣	二、九四・八
訥安縣	九、九四・〇	海倫縣	六、七四・〇	奇克縣	三、九二・六
嫩江縣	五、〇九・六	綏化縣	四、四〇・九	環珠縣	二、五〇・四
龍鎮縣	八、三三・二	慶城縣	一、八九・九	呼瑪縣	一、九二・四
通山縣	四、二四・三	通河縣	三、七四・六	漠河縣	二、六五・四
克山縣	四、二〇・六				四、五五・六

別に關東州及南滿洲鐵道附屬地面積を關東廳第二十六統計書より摘録すれば

總面積 三、七五二・四八〇  
關東州 三、四六二・四四〇  
南滿洲鐵道附屬地 二九〇・〇四〇

◇現住人口數(關東州及南滿鐵道附屬地不在其内)

大同元年十二月末日現在

縣別	人口數	縣別	人口數	縣別	人口數
全省	三、〇、一四七	其他	一、八四四	其他	一、八四四
奉天省	三、〇、一四七	吉林省	一、八四四	黑龍江省	一、八四四
熱河省	一、〇〇〇	北滿特別區	七、九〇〇	北滿特別區	七、九〇〇
黑龍江省	一、〇〇〇	新京特別市	二、八二七	新京特別市	二、八二七
吉林省	一、〇〇〇	哈爾濱特別市	二〇、四一九	哈爾濱特別市	二〇、四一九
熱河省	一、〇〇〇	興安東分省	一、〇〇〇	興安東分省	一、〇〇〇
北滿特別區	一、〇〇〇	興安南分省	一、〇〇〇	興安南分省	一、〇〇〇
新京特別市	一、〇〇〇	興安西分省	一、〇〇〇	興安西分省	一、〇〇〇
哈爾濱特別市	一、〇〇〇	興安北分省	一、〇〇〇	興安北分省	一、〇〇〇
興安東分省	一、〇〇〇	其他	一、〇〇〇	其他	一、〇〇〇
興安南分省	一、〇〇〇				
興安西分省	一、〇〇〇				
興安北分省	一、〇〇〇				

日本人九萬二千戸、五十六萬六千人、その他三萬戸、十三萬七千人、滿洲人

に至れば、氣壓の斷崖移せり古高原方面には低氣壓發生し易く、た



興安東分省 興安南分省 興安西分省 興安北分省

哈爾濱特別市 興安東分省 興安南分省 興安西分省 興安北分省

克通北縣 四、四一、三慶城縣 三、七四、〇六 漠河縣 二、八五、〇四

別に關東州及南滿洲鐵道附屬地面積を關東廳第二十六統計書より摘錄す

關東州 總面積 三、七五、四八〇  
南滿洲鐵道附屬地 三、四六、二四〇

平方杆 二九〇、〇四〇

◇現住戶口數(關東州及南滿鐵道附屬地不在其内)

大同元年十二月末日現在

行政域別	戶數	總人口		平均人口	每戶人口	
		總數	男女		男	女
全	四、八三九、八二一	二、九六六、三五四	一、六三三、三五四	一、三、七三、七六三	六、一	一三三、〇
奉天	二、二七〇、四一八	一、一四三、四二〇	八、三六、六九九	六、九四、七三三	六、七	一九〇
吉林	一、一六七、〇四九	七、一五、五四三	三、九六、六九五	三、〇六、九七七	六、一	一三三、五
黑龍江	五、五、〇四	三、六七、七七	二、〇六、八五	一、六一、八八五	六、三	一三、七
熱河	五、八、二五三	二、〇四、三五	一、二九、一三	九、九五	四、〇	一九、七
北京	二九、九五七	一、四、五七	九、九五	五、四、六五	五、〇	一七、八
新京	三三、四三〇	一、六、五七	七、七、一七	四、九、一三	五、四	一五、二
哈爾濱特別市	八三、三六六	四、〇、七九七	二、五、八六	一、五、九五	四、九	一六、四
興安東分省	一六、二二六	五、〇、四〇〇	二、九、七五	三、三、四五	六、〇	一〇〇、〇
興安南分省	八五、〇六六	五、〇、四〇〇	二、九、七五	三、三、四五	六、〇	一〇〇、〇
興安西分省	四三、二八三	二、五、七〇〇	一、六、一三六	八、四、五二	六、〇	一〇〇、〇
興安北分省	九、八三三	五、九、〇〇〇	三、九、三三四	一、九、六六六	六、〇	二〇〇、〇
滿洲人						
全	四、七〇七、一五六	二、六、九三、五九二	一、五、九五、五九二	一、三、四九、六四〇	六、一	一三三、二
奉天	二、二七〇、〇〇〇	一、一四三、四二〇	八、一七六、一五一	六、八六八、三三三	六、七	一九〇
吉林	一、〇九二、八三三	六、六九、一九一	三、六九、三三七	二、九六六、八七四	六、一	一三三、二
黑龍江	五、八、〇四六	三、六八、〇九三	二、〇五、三二六	一、〇六九、八五八	六、三	一三、七
熱河	五、八、三三二	二、〇四、一八五	一、二九、〇三三	九、三五、一六四	四、〇	一九、二
北京	二、四八五	一、三、五三九	七、四、二八九	三、九、二五〇	五、三	一八九、三
新京	三、三、五七〇	一、三、〇三三	七、四、四六一	四、七、七三	五、四	一五、九
哈爾濱特別市	五、五、五七一	二、九、五、六五	一、八、九、四八四	一、〇五、八八一	五、〇	一〇〇、〇
興安東分省	一六、二二六	九、七、三〇〇	六、四、八六五	二、二、六六五	六、〇	一〇〇、〇
興安南分省	八五、〇六六	五、〇、四〇〇	二、九、七五	八、四、五二	六、〇	一〇〇、〇
興安西分省	四三、二八三	二、五、七〇〇	一、六、一三六	八、四、五二	六、〇	一〇〇、〇
興安北分省	八、八三〇	五、九、三三四	三、九、三三四	一、七、〇五九	六、〇	二二、五
日本人						
全	九、五、七六	五、六、四七一	三、〇〇、六〇一	二、五、八七〇	六、一	一三三、一
奉天	三、〇、〇六	一、七、一〇三	五、一、三三三	四、五、七九〇	七、五	一一、一
吉林	七、四、六八	四、五、二二三	一、五、一八六	二、〇、〇〇六	六、〇	一一、〇
黑龍江	八、九、五	四、二、八一	二、四、二七	一、八、五四	四、八	一三〇、九
熱河	四、	三、〇	三、	九、	七、五	二七、〇
北京	五、三	三、〇、三六	二、一、三三	九、四	五、七	三三、二
新京	五、三	二、七、五三	一、七、七六	一、〇、六	四、九	一六、八
哈爾濱特別市	三、三、五六	一、三、七九五	七、六、三九	六、一、五六	四、一	一四、一
興安東分省	三、	一、	一、	一、	四、	一、
興安南分省	三、	一、	一、	一、	四、	一、
興安西分省	三、	一、	一、	一、	四、	一、
興安北分省	三、	一、	一、	一、	四、	一、
其他						
全	三、〇、一、四七	一、三、七、〇、五四	六、八、八〇一	五、八、二、五三	四、五	一、五、三
奉天	三、八、三三	一、八、四、四	一、三、二四	六、〇	四、八	一、七、四
吉林	五、〇	一、三、九	一〇、一	三、七	二、八	二、七、五、八
黑龍江	一〇、一	四、〇、四	三、九	一、七、五	四、〇	一、〇、九
熱河	二、七	九、〇	三、〇	二、〇	三、三	三、五、〇
北京	七、四、〇〇	三、一、九、三	一、七、五、四	一、四、四、八	四、〇	一、〇、八
新京	二、八、七	一、一、五、三	一、〇、〇、九	五、四	三、三	一、〇、八
哈爾濱特別市	二、〇、四、九	九、五、六、三、七	五、五、七、九	三、九、八、九	四、七	一、三、九、七
興安東分省	二、	一、	一、	一、	四、	一、
興安南分省	二、	一、	一、	一、	四、	一、
興安西分省	二、	一、	一、	一、	四、	一、
興安北分省	二、	一、	一、	一、	四、	一、



廣く分布する。

◇黑龍江省

第二章 戸口

戸口は國策の基本にしてその正確な調査を必要とすれど、草創事滋く未だ調査完全ならず、新京特別市で、大同二年四月十五日稍、組織的に臨時戸口調査をしたに過ぎない。故に茲には各地方官署の報告に基いて大同元年十二月末日現在戸口の概定數字を示す。之に依れば滿洲國の概算戸口は四百八十二萬九千餘戸、人口二千九百六十六萬六千餘人にして内男千六百三十三萬二千餘人、女千三百二十七萬三千餘人、毎戸平均人口數は六・一人、女百人に對し男一二三人に當る。更に人種別戸口數を見るに、滿洲人四百七十萬七千戸、二千八百九十萬二千人、日本人九萬二千戸、五十六萬六千人、その他三萬戸、十三萬七千人、滿洲人

は總人口の九七・六%を占む。今若し關東州及び南滿洲鐵道附屬地の人口を合算すれば滿洲人總人口約二千九百九十五萬千人、日本人人口約八十三萬八千人、その他人口約十三萬九千人、總計三千九十二萬九千人。

第三章 氣象

氣象を概観すれば、九月下旬頃より翌年四月上旬頃迄は、北西の蒙古高原方面に高氣壓を生じ、殊に十二・一・二の三箇月は高低兩氣壓部の傾度頗る大となり、爲めにこの期間は低溫乾燥の北西風吹き、氣溫濕度共に低下し、南部地方を除いては海面まで結氷し、重き貨物を満載せる馬車自由に河上を往來することを得。然るに四月中旬以後に至れば、氣壓の配置轉換せられ、蒙古高原方面には低氣壓發生し易く、た

めに濕氣を帯びたる南風又は東南風吹き、氣溫濕度共に上昇し、降水量又増加し、草木急に發芽繁茂し開花す。斯くて八月中旬頃に至れば、氣溫稍、低下し、九月に入れば既に冷涼を覺えその下旬には北部地方にては結霜を見、十月以後は再び冬季的氣候を呈す。之を要するに、大陸的の酷烈なる氣候にして、冬季の寒威凜烈なるに反し夏季は暑熱甚だしく、その中間季節の春秋極めて短し。然れども寒波濕波の轉換稍、規則正しく、殊に冬季に於ては一週間内外の周期を以て反覆する所謂三寒四溫の變化を呈し、ために比較的凌ぎ易き氣候を呈する。今大同二年時憲書に依り、氣象に關する統計を示せば左の諸表の如くである。



◇平均最低氣溫 (攝氏) (一)零度以下

地名	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年
大連	八.九	七.一	五.〇	三.〇	一.〇	一.六	二.〇	二.五	三.〇	三.六	四.三	五.〇	六.五
營口	八.九	七.一	五.〇	三.〇	一.〇	一.六	二.〇	二.五	三.〇	三.六	四.三	五.〇	六.五
奉天	八.九	七.一	五.〇	三.〇	一.〇	一.六	二.〇	二.五	三.〇	三.六	四.三	五.〇	六.五
新賓	八.九	七.一	五.〇	三.〇	一.〇	一.六	二.〇	二.五	三.〇	三.六	四.三	五.〇	六.五
鞍山	八.九	七.一	五.〇	三.〇	一.〇	一.六	二.〇	二.五	三.〇	三.六	四.三	五.〇	六.五
開原	八.九	七.一	五.〇	三.〇	一.〇	一.六	二.〇	二.五	三.〇	三.六	四.三	五.〇	六.五
鄭家屯	八.九	七.一	五.〇	三.〇	一.〇	一.六	二.〇	二.五	三.〇	三.六	四.三	五.〇	六.五
洮安	八.九	七.一	五.〇	三.〇	一.〇	一.六	二.〇	二.五	三.〇	三.六	四.三	五.〇	六.五
滿洲里	八.九	七.一	五.〇	三.〇	一.〇	一.六	二.〇	二.五	三.〇	三.六	四.三	五.〇	六.五
海拉尔	八.九	七.一	五.〇	三.〇	一.〇	一.六	二.〇	二.五	三.〇	三.六	四.三	五.〇	六.五
免渡河	八.九	七.一	五.〇	三.〇	一.〇	一.六	二.〇	二.五	三.〇	三.六	四.三	五.〇	六.五
札蘭屯	八.九	七.一	五.〇	三.〇	一.〇	一.六	二.〇	二.五	三.〇	三.六	四.三	五.〇	六.五
昂昂溪	八.九	七.一	五.〇	三.〇	一.〇	一.六	二.〇	二.五	三.〇	三.六	四.三	五.〇	六.五
安東	八.九	七.一	五.〇	三.〇	一.〇	一.六	二.〇	二.五	三.〇	三.六	四.三	五.〇	六.五
哈爾濱	八.九	七.一	五.〇	三.〇	一.〇	一.六	二.〇	二.五	三.〇	三.六	四.三	五.〇	六.五
寧安	八.九	七.一	五.〇	三.〇	一.〇	一.六	二.〇	二.五	三.〇	三.六	四.三	五.〇	六.五
密山	八.九	七.一	五.〇	三.〇	一.〇	一.六	二.〇	二.五	三.〇	三.六	四.三	五.〇	六.五
牡丹江	八.九	七.一	五.〇	三.〇	一.〇	一.六	二.〇	二.五	三.〇	三.六	四.三	五.〇	六.五
太平	八.九	七.一	五.〇	三.〇	一.〇	一.六	二.〇	二.五	三.〇	三.六	四.三	五.〇	六.五
延吉	八.九	七.一	五.〇	三.〇	一.〇	一.六	二.〇	二.五	三.〇	三.六	四.三	五.〇	六.五
三姓	八.九	七.一	五.〇	三.〇	一.〇	一.六	二.〇	二.五	三.〇	三.六	四.三	五.〇	六.五

◇降水量 (耗)

地名	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年
大連	一.二	一.四	一.五	一.七	一.九	二.一	二.三	二.五	二.七	二.九	三.一	三.三	三.五
營口	一.二	一.四	一.五	一.七	一.九	二.一	二.三	二.五	二.七	二.九	三.一	三.三	三.五
奉天	一.二	一.四	一.五	一.七	一.九	二.一	二.三	二.五	二.七	二.九	三.一	三.三	三.五
新賓	一.二	一.四	一.五	一.七	一.九	二.一	二.三	二.五	二.七	二.九	三.一	三.三	三.五
鞍山	一.二	一.四	一.五	一.七	一.九	二.一	二.三	二.五	二.七	二.九	三.一	三.三	三.五
開原	一.二	一.四	一.五	一.七	一.九	二.一	二.三	二.五	二.七	二.九	三.一	三.三	三.五
鄭家屯	一.二	一.四	一.五	一.七	一.九	二.一	二.三	二.五	二.七	二.九	三.一	三.三	三.五
洮安	一.二	一.四	一.五	一.七	一.九	二.一	二.三	二.五	二.七	二.九	三.一	三.三	三.五
滿洲里	一.二	一.四	一.五	一.七	一.九	二.一	二.三	二.五	二.七	二.九	三.一	三.三	三.五
海拉尔	一.二	一.四	一.五	一.七	一.九	二.一	二.三	二.五	二.七	二.九	三.一	三.三	三.五
免渡河	一.二	一.四	一.五	一.七	一.九	二.一	二.三	二.五	二.七	二.九	三.一	三.三	三.五
札蘭屯	一.二	一.四	一.五	一.七	一.九	二.一	二.三	二.五	二.七	二.九	三.一	三.三	三.五
昂昂溪	一.二	一.四	一.五	一.七	一.九	二.一	二.三	二.五	二.七	二.九	三.一	三.三	三.五
安東	一.二	一.四	一.五	一.七	一.九	二.一	二.三	二.五	二.七	二.九	三.一	三.三	三.五
哈爾濱	一.二	一.四	一.五	一.七	一.九	二.一	二.三	二.五	二.七	二.九	三.一	三.三	三.五
寧安	一.二	一.四	一.五	一.七	一.九	二.一	二.三	二.五	二.七	二.九	三.一	三.三	三.五
密山	一.二	一.四	一.五	一.七	一.九	二.一	二.三	二.五	二.七	二.九	三.一	三.三	三.五
牡丹江	一.二	一.四	一.五	一.七	一.九	二.一	二.三	二.五	二.七	二.九	三.一	三.三	三.五
太平	一.二	一.四	一.五	一.七	一.九	二.一	二.三	二.五	二.七	二.九	三.一	三.三	三.五
延吉	一.二	一.四	一.五	一.七	一.九	二.一	二.三	二.五	二.七	二.九	三.一	三.三	三.五
三姓	一.二	一.四	一.五	一.七	一.九	二.一	二.三	二.五	二.七	二.九	三.一	三.三	三.五



◇霜雪期節

大地	營奉新	鞍山	開洮鄭	海滿	免札昂	哈安	察一	牡太	延三
地名	口天京山	原南屯里	河屯溪達	爾賓	丹面	門坡	嶺江	吉嶺	姓
初	十一月	十一月	十一月	十一月	十一月	十一月	十一月	十一月	十一月
雪	九十七日	九十七日	九十七日	九十七日	九十七日	九十七日	九十七日	九十七日	九十七日
終	三月	三月	三月	三月	三月	三月	三月	三月	三月
霜	十一月	十一月	十一月	十一月	十一月	十一月	十一月	十一月	十一月

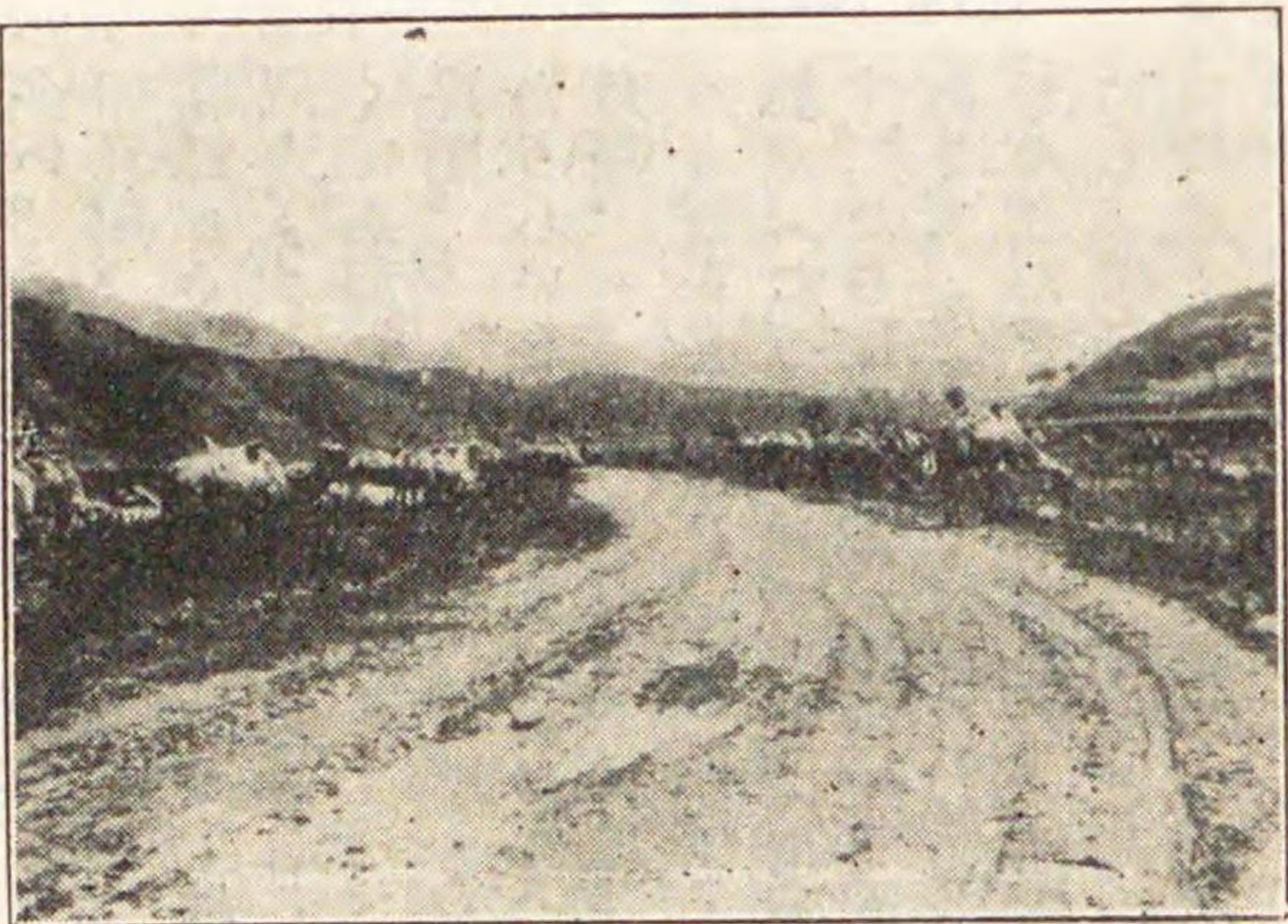
第四章 動物、植物

一 動物

滿洲は大陸の一部であり、従つて動物も大陸的なもの多く、熊・鹿・猪等に於て見る如く非常に形態の大なるものあり、淡水魚類にも大なるものを見る。又、滿洲特産と稱すべき特殊なる動物はなく、大部分は四隣と共通せるものである。

然して地勢の關係上、動物の分布を大體三分して見ることが出来る。  
一、滿洲北部シベリア地方 鴨綠江中流より遼河、松花江の境を通り興安嶺に至る線より北部の地方、  
此の地方に棲息するものは大體に寒地性の動物であり、しかも、山地多き爲め、木上に巢を造り、樹上に棲むものが多い。

哺乳類としては、  
滿洲もぐら・うすりいねずみ・北滿は



承德附近 (熱河省)

りねずみ・おほやまねこ・うすりいへう・あむうるたねき・くるてん(木の

空洞に棲む)、滿洲てん・しべりあゑぞいたち・ゑぞいたち・あむうるあなぐま・あむうるねずみ・うさぎ・滿洲あかしか・じやこうしか・東しべりやじゆんろく等。

鳥類は、  
北滿維・くらいてう(興安嶺から吉林附近の森林に棲む)、あむうるゑぞらいてう・しべりあむくどり・きたあかげら・みうびけら・滿洲くまげら・しべりあおほせつか、等。

魚類は黑龍江に鮭科の魚多く、鱒魚の如く人間の丈よりも大なる種類もある。この外松花江・黑龍江に多く産するものに狗魚がある。此等は皆遼河方面には發見されないものである。

又爬蟲類には、からふとまむし・しべりあとかげ、兩棲類には、きたのさんしやうを等が居る。

二、蒙古地方 興安嶺の外側、コロ







は全くその影を絶ち、熱河に限りその生育を見る許りである。

この外満洲は冬季乾燥するが故に殆ど潤葉樹の生存するものなく、松その他に見るが如く細い葉(針葉樹)を除いては悉く落葉するのである。僅かに、南満洲にこごめつつじ、北満洲にゑぞむらさきつつじの二つのみが冬季葉を有する植物である。

左に植物分布の概要を見るならば、大連附近は大體北支那に共通のもの多く、路傍に綺麗に咲く、こにはざくらがあり、その他ねむのき・百日紅・こしゆ・香椿・臭椿(樗)、アカシア・ポプラ・櫻・藤・林檎・梨・等、朝鮮より東満洲山脈邊に掛けて、野葡萄・満洲胡桃・きわだ・てうせんごみし・さるなし・等朝鮮及び南満洲安東邊に限り、あやめの生育を見る。又ねじあやめ・百

合は満洲到る處に野生し、平原地方の山間にも生存する。

鞍山から鳳凰山、東満洲山脈にかけては、他部に見られぬ差異を示し、樹木は密生して居る。朝鮮松(落葉松、潤葉樹)・満洲黒松・ほたるぶくろ・柳・榆・等

興安嶺より東満洲山脈には、芍薬の野生するものあり、特に興安嶺に多い。又この地方よりロシア東部線沿線到る所の山は鈴蘭に蔽はれて居る(南満洲地方は五月中旬頃盛りであるが北部は六月から六月下旬に盛んとなる。)

興安嶺は山間の平地がありそこに河の流るるを見る。白樺、落葉松が鬱蒼と生へ茂つて居る。熱河はシベリア赤松。

以上の外満洲全體として、わうごん(黄岑)の生育を見、南満洲には朝鮮

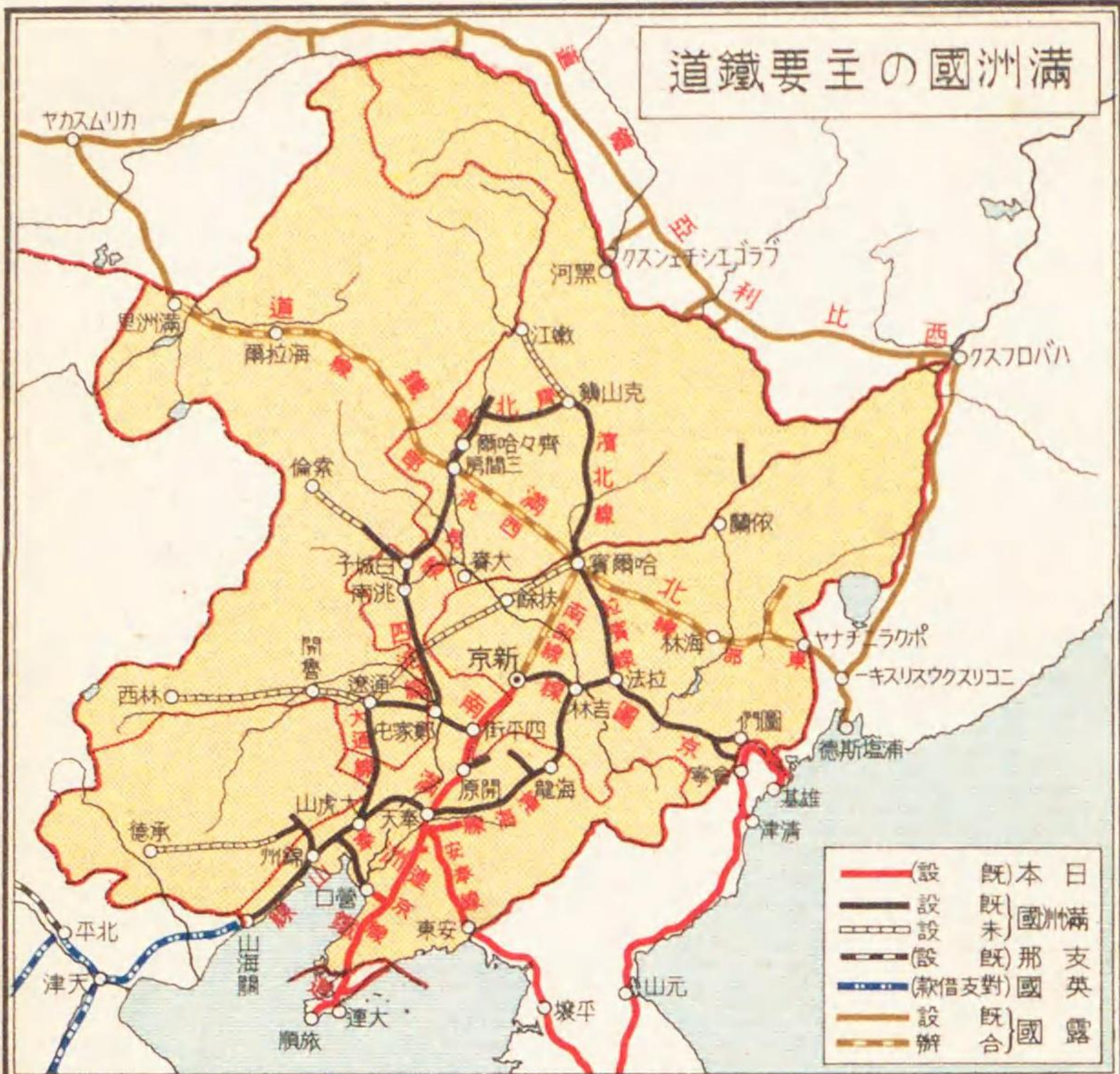
菊・おきな草等、また北滿にかけて櫻草なども見える。而して萇蓉(ヒヨク)は安奉線の分水嶺以北に限り澤山野生して居る。次にハイラル・興安嶺の西方荒原は作物は無く草原である。蒙古沙漠はサハラ沙漠と異り、所々に砂山を見る外、一體の草原である。

表 照 對 年 歴

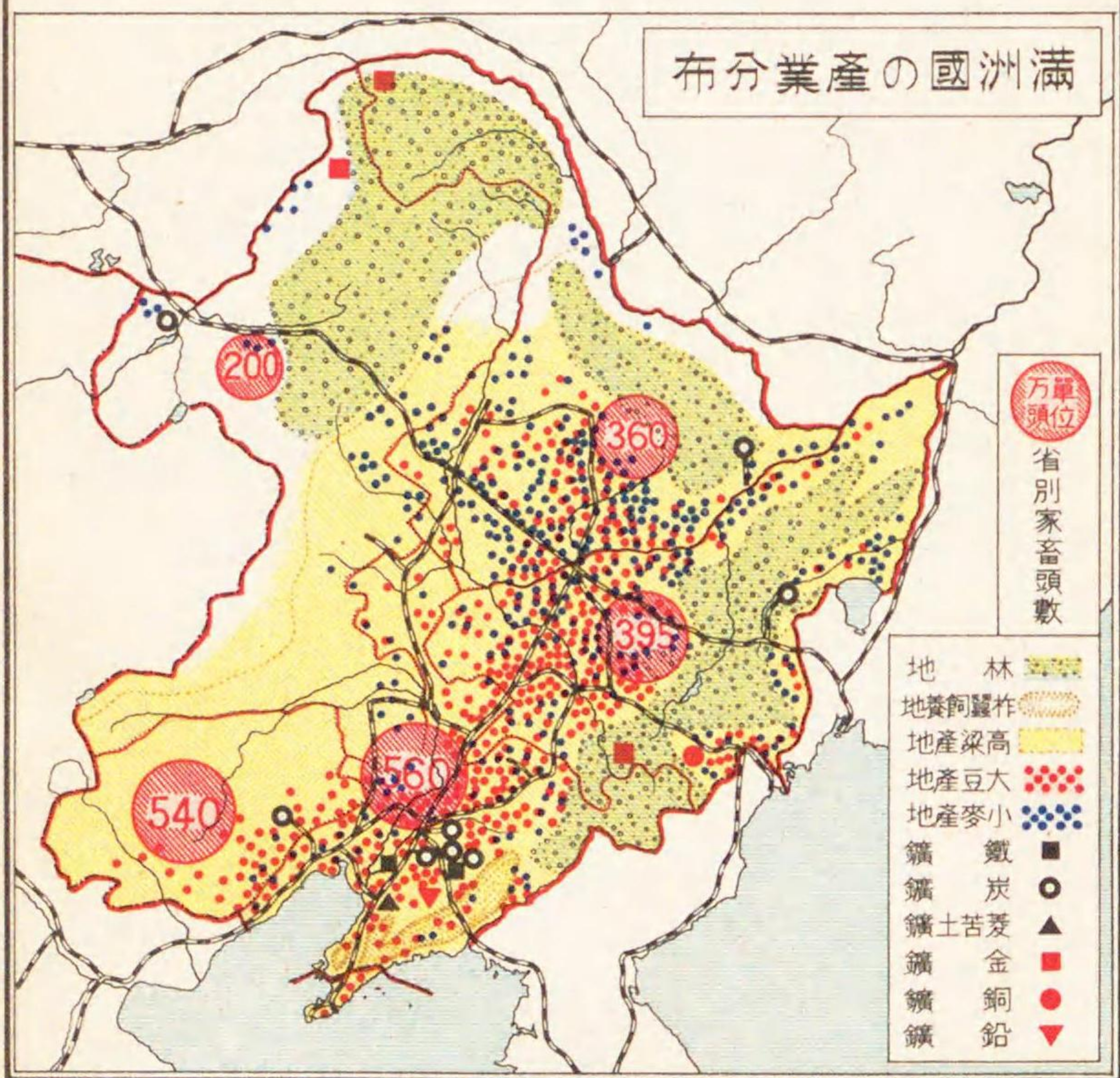
日	本	支	那	西	日	本	支	那	西	日	本	支	那	西	日	本	支	那	西
弘化	元	道光	同	同	明治	元	同	同	同	明治	本	支	同	同	大正	支	同	同	同
同	三	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	二	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	元	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	四	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	三	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	二	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	元	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	七	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	六	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	五	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	四	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	三	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	二	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	元	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	一	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	〇	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	九	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	八	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	七	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	六	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	五	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	四	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	三	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	二	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	元	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	一	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	〇	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	九	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	八	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	七	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	六	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	五	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	四	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	三	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	二	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	元	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	一	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	〇	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	九	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	八	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	七	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	六	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	五	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	四	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	三	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	二	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	元	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	一	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	〇	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	九	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	八	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	七	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	六	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	五	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	四	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	三	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	二	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	元	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	一	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	〇	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	九	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	八	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	七	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	六	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	五	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	四	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	三	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	二	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	元	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	一	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	〇	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	九	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	八	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	七	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	六	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	五	同	同	同	同														



滿洲國の主眼鐵道



滿洲國の産業分布





昭和九年六月二十日印刷  
昭和九年六月二十四日發行

不許複製



滿洲帝國總覽

定價 金二圓二十錢

編者 日本外事協會

發行兼印刷者 株式會社 三省堂  
代表者 龜井寅雄

印刷所 株式會社 三省堂蒲田工場  
東京市蒲田區出雲町一〇一番地

發行所 株式會社 三省堂  
東京市神田區神保町一丁目一番地

株式會社 三省堂大阪支店  
振替東京三一五五五  
大阪市西區阿波座下通二丁目六番地  
振替大阪八一三〇〇



!! 鍵 の 識 認 國 洲 滿

最新滿洲國地理

東京高校教授 淺野利三郎著

◆ 改訂版

三六判・クロス装・二四〇頁  
定價 四十錢 送料二錢

滿洲帝國地理

三省堂編輯所編

菊判・美装・五〇頁  
定價 十五錢 送料二錢

渡滿と衛生

前滿洲醫大教授  
醫學博士 豊田秀造著

四六判・クロス装・二七〇頁  
定價 一圓五十錢 (送料二錢)

行 發 堂 省 三







